

# エデュケイショナル スノウ

～ある十二の報告集から～

夢屋プラネットワークス  
“游人”  
宮本 誠一

## プロローグ

総司令官閣下殿、私たち一行が、この辺境の地へひそかに参りましてから既に数年が過ぎ、観察調査しましたことについてのご報告をいたづらに引き延ばしながら日一日と恐縮していたおり、このたび届きました閣下からの御催促の御言葉に私自身、覚醒の感がありまして、これまでの己の俊巡を今さらながら遺憾と思ひ直す次第、ようやくここにペンを執ることになった旨をまずもって、お伝えせねばなりません。と言いますのは、閣下が最もお知りになりたかったこの地域に於ける、今現在とられている教育の現状を考えましたとき、私たち外部の者から見た場合、どうしても推察しようにも出来ない、ある線上を越えた地点があり、それらがあたかも、この地域独特の干満の激しい潮の満ち引きとともに姿を現す幻の防波堤の如く我々の思考を悩ましつづけ、冷静な判断を極力しづらくしていたということがあったからです。我々は、我々に課せられたその職務と責任をけっして忘れたわけではなく、これら具現する視差をできるだけ最少限に押さえ、あるがままに、そこから過剰なものを多く取り除き、客観的な根拠に近づけようと日夜努力を重ねて参ったのですが、なかなか各々の考えをうまくまとめることができず、遅ればせながら、今ここにこうしてお詫びを兼ねた微力な報告書の紙片をお渡しするに及んだ次第なのです。結果はどうであれ、既に開始された以上、この遅鈍なる文面が双方にとって、幸なる糧の第一報となればと願っております。

さて、最も重要なことからお話いたしますに、開口こんなところから始めるのは不躰でありましょうか。閣下には、我が国で行われている初等教育の、ある一つの小学校の教室での授業風景の一場面を想い浮かべていただきたく思います。それには、これといった別段の教科の選定はしなくともよろしいかと思ひます。ただ、全体に共通する大まかなところだけは、しっかりと想像していただきたいのです。私が考えますに、その辺りにこそ我が国全体とこの辺境との最大なる相違が潜んでいると思われるからです

## 第一の報告

---

総司令官閣下、先頃、この地域の教育を司る機関の独自の調査によって、小学、中学就学者数の発表に合わせ、地方公共団体の設置した公立並び監督庁の認可する学校法人等の管轄内にある教育施設以外に通う子どもの総数が発表されました。そこには、学校をなんらかの理由で不登校になり、もしくは免除された者を含め、中途退学者などもいるほか、この地域の最大の目玉であるJUKU産業の隆盛による併学パターンが顕著に見られたそうです。たとえば第六学年を例にとれば、全体数に対し、なんらかの形で他の施設へ通っている生徒数はほぼ、その三分の二に達し、時間数にすると一人当たり年間のべ、約半分の割合をしめるほどになっていたといえます。これは、最近、この地域でようやく現実となった週休二日制にもっともその原因の多くがあることは確かで、その年は、『新たなるJUKU年間』とか『公キョウイクの終末』とかが叫ばれ、教師の志望者は、相かわらず根強かったものの、後退してきた景気の波も計算には入れるべきであったでしょうが、以前とおなじく一般企業への希望者は多く、中でも学生たちの就職の目玉として企業の上位に初めて実験的に有名なその民間教育施設の一つが上がったのもスクープとして各マスコミに取り上げられたほどです。

総司令官閣下、参考までに、ここでこのJUKUのご紹介を一ついたしたいと思います。名前は、CAN進学センターです。センターは、本部をこの辺境の海岸沿いの都市に持ち、数多くあるJUKUの中でも近年急成長を遂げてきた会社で、ほぼ中堅の位置にあります。100%子どもたちの能力と学力のバック・アップを約束するという振れ文句で健常な小学、中学の児童だけを対象として出発した進学JUKUです。その基本理念は、社名も示すとおり「教育」という名称を取り払い、受験に向けての学習指導のみを徹底して行うことにあり、ある学者がかつて言った『どの教科でも知的な性格をそのままにたもって、どのような発達段階にある子どもにも効果的に教えることができる』ことを、受験に巧みに置き換えカリキュラム化し実践しようとする、いはば家庭教師とJUKUとを合せ持ったような受験集団なのです。

代表という位置にいる片桐という男は、三十八を今年迎えたばかりの年齢で、彼自身中学から高校に至るまで或るJUKUに籍を置き、それが後の自分の人生に大いに役立ったということをししばしば表立ち口に上らせているそうですが、しかしそれは、彼がJUKU経営をやっていることからの手前、宣伝効果を考え勝手に公言していることだというのがもっぱらの評判です。彼の素性の本当のところは定かではなく、どのような経歴を持ち今に至ったのか、彼の出身が本部の置かれている場所の近くであるということのほか余り人に知られてはおりません。常務でもあり事務局長であるもうひとりの男、瀬上の存在は、今や代表にとってなくてはならない存在であり、良きアドバイザーであると同時に優秀な社員の位置もしめ、多くの保護者や生徒たちから信頼を受ける講師でもあるということです。もともと彼は、センターが契約していたビジネス・コンサルタントの社員でしたが、ひよんなことから代表に見込まれ五年ほど前にセンターの会員数約半分を領するBブロックというところの常務の肩書きをもらい、運営に関するほぼ全責任をまかせられるようになったということです。彼はその後、期待を裏切ることなく仕事に励み、むしろ最近では代表片桐以上に積極的にセンター運営に取り組み、その発展につくしております。今度

、手を伸ばすことになったこの東部R地域進出も彼の業績に負うところが大きく、前途に於いても重要な鍵を握っていることは特筆すべき点です。

JUKUの宣伝の方法はこうです。ビル管理会社や不動産との話も終え、メインの会場となり、今後子どもたちが学習することになる貸しビルの手配も終えた状態からすべては出発します。地元ではかなりのシェアを誇る有名百貨店の階上にある、陽光の燦々と降り注ぐスタジオ風ホールのできるだけ派手な場所を借り切って、第一回目の説明会というものはまず行われます。オーストラリアの大平原など、世界各地の解放的な景色をバックにその期その期に決められるテーマである、たとえばここでは「虹」と「滝」だとすれば、それをあしらった派手なポスターを作成し、およそ子どもたちの学習とは遠くかけ離れた旅行代理店のPRのため催された会合のようにもそれは映るとのことです。

説明者が、常務瀬上から代表の片桐へと変わっていくときがもっとも、この会のクライマックスといってもいいようです。このときばかりは保護者たちを後方から取り囲むように立っている職員たちにとっても、一斉に壇上のステージに注目し緊張する一瞬です。ここからは、実際に一年前、行われたR地区での説明会を例にとりお話してまいりたいと思います。と申しますのは、このR地区のセンターの行方こそがこの報告文でも今後、重要な位置をもってくると思われるからです。

そのときも、予定より少々早く瀬上の話が打ち切られたことでさえ誰もあまり気にならないかのように、シルクや麻のスーツを真新しく着込んだ入社したての進入社員たちが、ちらほら斑のように列をつくり会を盛りたてていたということです。一つ一つ服の袖や襟もとが光を受け、同じ色彩がかかった濃緑色の壁に溶け、それを背に影と一体となりその輪郭をあたかも都会に生息するカメレオンよろしく、保護色として和ませているのがそのときの彼らの特長といってもいいでしょう。中には、いかにも清潔感の漂ってきそうな地味ながらも若さをうまく引き出す薄手めの服を、自分の躰の細かな線とかさねながら無難に纏っている者もいるにはいますが、それはきわめてごく少数とのことです。他にもこの説明会のときだけはできるだけ大がかりに見せるため他の局から応援に駆けつけた社員が多く並んで立っていることは言うまでもありません。壇上に上がっている代表片桐のその時点からの話しぶりこそが、おそらく全てを決していく気配なのです。そのことを社員たちは、自らのやや緊張気味の表情や、腰の辺りを探るように組み直す腕の様子などで露にしていきます。しかし、動向を待ち受ける大半の保護者たちは、それとはまったく反対です。保護者のうち、その多くをしめる母親たちは椅子に腰を落ち着け全身に漲っていたこわばりをようやく解き始め、突然に緩み出した筋肉の始末をどうつけようかと、手慣れた動作で躰の持っていき場を試すふうにするのもこのときなのです。それでも筆記用具を勤勉に走らせつづける者も何人かいることは、親たちのいかにこのJUKUに賭ける熱情が凄まじいものであるかを物語っています。そんな状態から常務から代表へのスピーチの交替は、いくつもの説明会をこなしてきた職員たちの眼にはまさしく時を得ているように思われてくるものなのです。

「お母さん方は、子どもさんたちにまず何を望まれるでしょう」

代表は、壇上に上がるや否や、タイピン式のマイクから常務とは若干違った高く透った声で話し始めます。それは、母親たちにとって、今最も神経を研がしている質問といえ言えないことありません。躰を心持ち倒しかけていた母親もこの時ばかりは否応なくステージに視線を向けさせられます。代表の話はつづきます。

「ただ、良い中学や高校、大学に合格してもらっただけで満足なのではないでしょうか。おそらくそうではないはずです。今やそれだけでは不十分なことはわかりきっています。子どもさんたちの幸せにとって、強いては親御さんの願いにとって、それではとても納得のいかないのは当然です。そのことは、この社会そのものが答えをだしてくれています。かつて半世紀以上前には紡績業で栄え、その後衰退し海岸を埋め立て安価な原料と資源を海外から手にいれることにより化学工業を興し、奇跡的に復活を遂げてきたこのR地区も、ここ四、五年都市部の不景気の影で泣かず飛ばずな状態がつづき、生産性は落ち込み、それに拍車をかける勢いで慢性的な底なしの不況に陥りました。その後は坂道を転ぶように輸出削減にコスト高、人員整理と約束された将来の姿はなく、前途多難であることは私どもが申すまでもなく保護者の方が最もよく御承知のことと思

ます」

総司令官閣下、この時こそ、ステージ下の席で聞いていた常務をはじめ、多くの社員たちが、決まってハッとした思いに駆られるときはありません。代表の発言の中には、そのとき新しく取り込もうとした内容は全くなく、しかも会場に来ている保護者のうち、地元の化学産業に従事している者が少なくないという、前もって得ていたセンターの知識を彼は彼なりに独自に計算しての筋書きが話されていることが明らかだからです。まず、センターへの費用を払うのは親であること、その親を説得し、脅かすのだという今となっては忘れられてしまったJ U K U産業の鉄則を、片桐の歯に衣着せぬ言葉は常務や社員たちの脳裏にまじまじと思い出させてくれるのです。閣下、なんということでしょう。ここでは、『脅迫』のあの心理戦が教育をとおして白昼どうどうとおこなわれているのです。

かつて、そのセンターを他の私j u k uと同じようにビルからビルへ部屋を借り運営していたとき、彼、すなわち片桐はある鉄則のようなものをつかんでいったと聞いています。それは、当然のことですが、地域性と産業とは大きく結びついているということです。特に、このJ U K U産業の場合、不況地域であればあるほどその運営は旨いくのはなんとも皮肉なことです。親の子どもへの期待は、自らが労苦を嘗めれば嘗めるほど、その都度大きく膨らんでいくかのようなのです。当然、それに見合うだけの代償もあります……。同業相争めく過当競争がそれです。そんな場所には、昔ながらの個人経営の根を張ったj u k uが少なくないのです。代表は若い時分、それらを容赦なく包囲し根絶やしていったと聞きます。

まず、さしずめ派手で、しかもすっきりした堅さのある文句で宣伝広告をやったあと説明会を開き、その後の第一陣乗り込みでは、今と同様徹底した個人指導を行ったと調査には明記されているのです。けっして現在のように華やかでないビルの一室を借り切り、生徒が一名であろうが二名であろうがその時講師は、つきっきりで指導していったそうです。もちろん、そのころセンターの職員は今ほど多くはなく、学生や一般者を講師としてそれに見合った賃金で雇い、五対一の比率で保たれていたと聞いています。子どもを指導していく場合、少しでも上のクラスへの進学が可能な子に対しては時間を惜しまず、深夜まで授業はつづけられるのがこの業界の常識とも言えました。確実に本人の成績を上げること、あるいは本人の希望する中学、高校へ合格させることが先鋒耕し組には義務づけられているのです。

実績が一つ増え、二つ増えしていくうちに各々の口コミや評判によって、生徒数も十人、二十人へと増え、ある程度各学年の人数が満たされ、その地区での経営に見込みがついてくると、今までの個人指導からその内容は一変します。徹底したスパルタとできるだけ組織だっで見せるためのテスト攻め、データ攻めです。テストは、毎週各教科ごとに行われ、その頃契約していたコンピューターの別会社によって各地区ごとに集計され、割り出された得点や偏差値が棒グラフとなって送られてくるのです。子どもたちは、毎週それを受け取ることにより、学力が前の週に比べどのくらいついたのか、一目でわかるようになっていて、同時に配られる全国版成績順位表に早く自分の名前を載せることが、センターの中でも特に「出来る」子どもたちの願いであると言っているわけがあります。

## 第二の報告

---

総司令官閣下、たとえばこの地で、ある生徒が虹を見たとします。虹は、いつも存在しません  
が出現するときがあります。それは、決まって雨の降っているときか、雨上がりのときで、子ども  
の示す反応もどうしてそんなときに現れるのか不思議に思う子がいたり、虹の美しさに見とれ  
たり、まったく無関心であったりまちまちでしょう。しかしこれを統一し、学習行動を喚起させ  
、持続させ、完成に向かわせる動機づけとして十分なものにしようとしているのがCAN教育セ  
ンターの狙いであると言ったらご理解いただけますでしょうか。知識の注入よりむしろその奥に  
ある感覚反応そのものを錬磨し、子どもたちの意欲を呼び起こすに最適な効果を発揮できるよ  
うしていくことが、今現在、センターでは試みられているのです。

それでは、学習内容に興味や関心を持たせるために最も必要な心理的作用とは何か。それは、  
稀にそんな子どもたちの中に、なぜ虹がこんなにも美しいのかを疑問に思う子がいることです。  
その子は、それを知るために、色の組み合わせに興味を持ち、七色に自分の肉眼で識別でき  
ることに気づくことでしょう。虹を組成している雨滴がプリズムの役目を果たし、光を分光するこ  
ともわかってきます。そうすれば、太陽からふりそそぐ自然光は混合色であることにも理解が  
つながり、紫外線や赤外線への認識へも役立ちます。しかし、それだけわかっていても最後に  
どうしても解けない疑問にぶつかります。それは、なぜ自分がそんな虹を美しいと感じるか  
です。その子は、この重い問題に三日三晩悩みつづけます。とても小学生や中学生には耐え  
られないことかもしれません。ところが、ここにある一つの貴重なデータがあるのです。  
このCAN進学センターの側からある操作、極めて限定的な設定をしてやると、その子は  
どんな形であるにせよその疑問に対するその子なりの答を用意して来るとい  
うものです。その設定とは、一人一人の子どもに応じて様々であり、多種多様  
です。ある場合には、単に答の期日を決めてやる時もありま  
すし、また別の場合、考えさせる時間や曜日を指定してやることもあります。すると、  
驚くことにその子は見違えるほどに思考を深め、見事な答を導き出してくるのです。

閣下、例を紹介いたします。中学校一年生の女の子の場合です。その子には、夜寝る前の三十分  
間を「考える時間」として、センター独特の『シレン』という形式で与えさせたとのこと  
です。もちろん、家庭の方には本部のセンター側で決められた時間を必ずチェックするよう  
忠告してあり、万全の体制が整えられています。そして、この作文は、センターの会  
員を募集するにすべてを決すと言われていたさきほど御報告しました第一回目の説明会  
でこれまでとはまったくちがったパターンのもと、保護者へ配られる資料として使  
われたといひます。なぜ、書く側に夜寝る前という設定をしたのかは、後々閣下には  
念いりに説明させていただきたいと思ひます。

## 『シレン』・その1

わたしは、虹は、星に似ていると思う。星は夜、お日様がしずんでから空が晴れているときでくるけど、虹は、雨がふっているときや止んですぐ、お日様がときどき顔をのぞかせるときにしかでてこない。だから、見るのもたいへんだ。前わたしは、虹や星をいろんなところで見ていた。とくに多かったのは、天井の木目模様が虹に見えたりしたことだ。夜、自分の部屋で布団に横になっていると、そこだけ気味の悪いほどモコモコ浮かび上がってきて、まぶたを閉じると、ちょうどそのうらっかわで色がパーッと飛び散ってしまったようになって、頭だけがほかのところから切り離されて宙に浮かんでいるような、熱がなかなか引かずうなされて、それでも眠って目を閉じていると少しずつ階段を一人で遠くへのぼって行っているみたいな、うれしいのになぜか悲しい気持ちで自分の家から離れていつている、まるで、わたしをつつみこむものが、星か虹かのどちらかで、きれいなんだけどふわふわしていてなじめそうでなじめないへんな気分だった。でも、そんなときにかぎってあとで考えるとぐっすり眠れていたのも本当でとても不思議だ。

虹で、もう一つおぼえているのは、おじいちゃんの死んだときの火葬場だ。おじいちゃんは、わたしが小学校三年生のとき死んだのだけれど、いつもはあまり口もきかず、おこづかいをくれるときだけわたしは笑って、ありがとうと答えていた。きっとあのときも、そんなわたしのバチが当たったのにちがいない。おじいちゃんは、死ぬそのすぐ前にお母さんと病院へお見舞いに行ったときは、とてもつらそうに、一人で立ち上がることもできないくらいくたびれていて、体中しわだらけでやせていて、かわいそうなぐらいみじめだった。火葬場では、そんなおじいちゃんが灰になってしまうまえに、一度だけ燃えているところを見たい人にだけ見せてくれる。わたしは、なんだか死んだ人とはいっても真っ赤な炎の中についこのあいだまで生きてお話をしていた人が横たわっているのを見るのが、とても怖い気がして、残酷に思え、それでも、これでおじいちゃんと会うのは最後なのだからお別れをしておきなさい、というお母さんの言うことを聞かないでそばを離れていくわけにもいかず、しかたなく親戚の人たちの一番後ろにくっついていくつもりで、恐る恐る裏側へまわってみた。長いかぎのようなもので男の人が下に敷いてある鉄の板を引き出すとゴーツという、ものすごい炎の音とっしょに、おじいちゃんが入れられたお棺がその上にのっかってあらわれた。なんだか、チカチカするような青白い火のかたまりにおおわれていてよく見えなかったけど、おじいちゃんの目を閉じた苦しそうな顔がその中から突然ぬーっと浮かび上がってくるような気がして、わたしは、あわててまぶたを閉じてしまった。そして、みんなとっしょに、そのときはじめて手を合わせいっしょうけんめいお祈りしていたように思う。わたしは、今からふりかえると、そのときの炎が虹のように七色の光を放っていたような気がしてしかたがない。虹が、パツパツと大きく息をするように、辺り一面に広がっていくような、青い風のない空の下で昼間っからみんなで花火を囲み、線がいっぱい刻まれたセルロイドをとおして見ている、そんな不思議な感覚だ。星にもにている。もしかすると、あれが美しいということなのだろうか。人は死んだら星になるというけれども、ひよっとするとその前に、だれも知らないところで虹になるのかもしれない。でも、虹になったすがたをまわりにいるほとんどの人は、気づかない。わたしだってそうだ。今度、ここにやってきて、こうやって決められた時間に考えるようお母さんに勧められて、わたしは初めて気がつき出したのだ。わたしにそんな経

験があったなんて自分でも驚いているぐらいだし、これまでもそんなことはぜんぜん知らなかったのだから。そろそろ、約束の三十分間も終わろうとしている。お母さんが様子を見にやって来る時刻だ。わたしは、自分からベッドに横になろうと思う。虹はまた、今度はわたしの夢の中に出てきてくれるかもしれない」

さて、総司令官閣下、繰り返しますが今のは一つの例にすぎません。ここでもう一つ 『シレン』を紹介しておきたいのです。今度は、小学校六年生の『ユウメイシリツ』といわれる、ある中学受験を前に控えた児童の書いたものです。既にお手もとにはそれと同じものがとどいているかと思いますが、閣下には、ざっとその紙面に目をとおして戴きたいのです。それから話をすすめていくことにいたします。この子は、小学四年生のときからわれわれの調査の対象となっており、その後、このセンター独自の二時間ごとにステップを組んだ発展的学習方法によって、着実に学力を上げてきた生徒の中の一人ということです。それは、彼が特別優秀だったということを示すのではなく、ただ着実に毎日センターが与える課題を消化し積み上げてきたということにすぎないのだそうです。それでは、消化する力をやはり人以上にその子が持ち合わせていたのではないのかという疑問を閣下は持たれるかもしれませんが、それもたしかに当然のことと思われれます。しかしそれには、このセンターの教育においてはプログラムがけっして数種類に分かれその型に嵌め込み押しつけるといった従来の学校教育で行われていたものではなく、それぞれの子どもに合わせた学習パターンによって分岐化と時間差の違いを考慮し、個人差に応じた細かなカリキュラムに基づく徹底した個別指導を行っていることから充分それが見当違いであることをのちのち閣下は、御判断されるのではないかと思われれます。

その子には、先程の女の子の場合と違い、朝、学校へ通う前の三十分を考える時間として充てさせたとのことです。また、そのことについては女の子同様、のちほど説明することにいたします。

## 『シレン』・その2

ぼくは、にじを先生や友達といっしょに山登りしたとき一つではなく、二つもつづいているのを見た。滝が近くにあってざあざあ音がいつているそのすぐそばの岩がごつごつしている場所でお弁当を食べ、みんな食べ終わるころには少し天気も悪くなっていたので、早めにそこを下りることになった。みんながバスの駐車しているところまでつくころには雨は小雨だったけど少し頭に落ちてきた。でも、バスが動き出し、海岸を目にして走り出したとたん、いよいよ真っ黒になっていた雲のあいだからわっと大つぶの雨がふってきて、たちまち窓は水びたしになってしまった。雲の流れがはげしくてものすごいスピードで動いていた。雨はとても強かったけど、またしばらくするとやんでしまった。少し雲のうすいところから太陽が見えた。そのとき、今度はぼくの右手の方に二つのにじがつながって、ちょうど海と山とをむすぶように橋のようにかかっていたのだ。ぼくは、びっくりした。みんなもよろこんでいた。先生は、マイクを使って、どうしてにじができるのかをすぐに教えてくれた。だけど、そのときはちんぷんかんぷんでよくわからなかった。それでぼくは、にじがどうしてあんなにきれいなのか知りたくて、あとで先生に聞きに行った。先生は、紙に書いてわかりやすく説明してくれた。だいじなことは、きれいなすんだ空気がないとあんな透きとおったようなにじも見れないということだった。とても勉強になった。それからぼくは、にじが早く見たいといつからか思うようになって、天気が少しでも悪かったり、雨がやんで少し晴れ間がのぞいていたりするとできるだけ空を観察するようになった。自分でもホースを使ったりなどして実験をやってみたが、なかなかあのとき見たようなにじを思いどおりにつくることはできない。とても残念だ。ぼくは、いつの日か、世界で一番きれいなにじ

を自分のこの目で見てみたいと思っている』

### 第三の報告

---

さて、総司令官閣下殿、またこの地の学校の現場に報告の中心をもどしたいと思います。まず、この辺境における諸々の教科、授業には様々な見方、受取り方ができるかと思われます。それは、小学部から中学部までの間に最も顕著にその特徴が見られると思うのです。そこで、授業内容に入る少し前の段階からわずかではありますが、こちらがまとめた点をここに御報告しておきたいと思います。

この地域においては子どもたちは初めに、縦横に整列させられ与えられた自分たちの席に座り、黒板の前に一人の教師が立ち授業を行う形式が取られます。子どもたちの人数の標準は大体三十名から四十名程度です。当然、彼らは常に一望の下に監視せられその一挙手一投足が教師の眼によって晒されます。教師は、『キョウダン』と言って子どもたちのいる場所から一段高くなったところに立ちそれを実行するのです。最近では、この『キョウダン』がどういうわけか取除かれ出しているのですが、一人の視察員の報告によりますと教師たちの何人かが集まり、この『キョウダン』に対し反対の意志を表明し、教師と子どもとを同じ位置関係に立たせようとする運動を起こしたようで、それでもまだ周囲から絶対の賛同を受けたわけではなく、それに最近ではかえってそうすると子どもたちの授業態度がますます悪くなり躡の面にも悪影響を及ぼすとか、ただ単に教師や黒板が見えにくくなって授業に差し支えるといった意見を述べる親や教員、それに一部の生徒たちまであらわれたため、現場はわずかこれだけのことに混乱の極みに達しているということです。

総司令官閣下殿、しかし、私どもがここで最もお耳にとどけておきたいことは、そういった現象面のことではなく、そこに常に大きく欠落している、そのために最終的にはこの地域の様々な出来事がいつも同じ結論なり方法としてしか導かざるを得なくなってしまう事象のことなのです。私が先に見えない防波堤と称したのも、実はこの一つといえるのかも知れません。

総司令官閣下、この地では、様々な問題が学校内で起こったとき、必ずと言っていいほど無視されるか軽視され、または排除される者が出てきます。それは問題そのものにも因りますが概ねどのケースにもあてはまりそうです。ある時は担任を受け持つ教師であったり、またある時は、それ以外の教師であったり、そしてこれがほとんど多くの場合を占めるのですが、学校教育においては恐らくその主たる存在であるべき子どもたち自身がその対象となることも決して少なくないのです。閣下はこのことをどうお考えになられるでしょうか。そんなことはわかりきっている、我が国のどこの場所でも多かれ少なかれ同じことだ、とお考えでしょうか。しかし私どもが推察しますにこの辺境の地においては暗黙のうちに問題そのものを、その当事者である人間もしくは大切な実証を核心の外へ置いたなかで第三者が決定を下し、その上で肝心の話し合いを行っていくという形態が作り上げられてしまっているか、もしくはそれに馴れ切っているように思われるのです。もちろん、そのことに意義申し立てをする自由もありますし、現にそういう者もいます。しかし如何んせん、その者らさえも別の立場にいるときは自らも同じ排除といった行為を繰返していることで引け目を持つためか、それらが網の目のように互いの位置関係の上に下り立ち降り重り、無反省に流れていつてしまっていることが少なくないのです。先程の例を取ります

と問題は『キョウダン』その本体に本質の問題があるのではなく、子どもたちの眼から見た時の教師の側にある眼に見えない『キョウダン』そのものに問題の本質はあるはずなのですが、そのことに気づいていながら実は、教師たちもそのことを後回しさせる形で順繰りに、それぞれの意見を出し合う場としてその時々を凌いでいる感がしばしば見受けられるのです。

子どもたちは教師を『センセイ』と呼びます。それには、先に生まれた人 という意味が含まれ、この地域がかつて最も強く影響を受けた我が国よりむしろ海を越えた大陸の思想が大きく働いていることがうかがえます。普遍性より経験訓を、日常性より建て前を、個人より集団をとという考えが今も所々に、しかし確実に息衝いており、むしろそれは、過去の歴史の残滓というよりも、やはりこの地域の特質そのものなのです。我々調査団もこの事で大きく頭を悩ませました。その地域の文化をあまりに外からの影響のみで捉えてしまったり、また歴史性のみで整理しようとしていたため見逃してしまっていた断層のような陥没があったことに気づいたのです。

根本的なところから申します。閣下、この地には教育というものが、もしかするとこれは全てに相当するのかも知れませんが、もともと自らの内から生まれ出し切り開かれていったものではなく、授けられ与えられ、こちらがそれを受ける側にあるという関係のうちに成り立たせることで話の折合いをつけ手を結んでしまったため、各々の胸の底ではわざわざ行きついた個々人の自由な支流から遡り、今度は逆に集団の本流に辿り着いてしまうことがはっきりわかっている、決まってある八方塞がりのところへ振り返りついてしまっていることがままたまあるということなのです。我々は何かそこに、この辺境の地の自らの拵えた陥穽のようなものを感じないではありません。かつて外国政策によってヘロインづけになったある一国のように、この地域にも閣下のおっしゃるような我々の中央と同様の、もしくはそれをもとにした教育制度をこの上さらに、強行にもたらしたならば、当然この地域の教師や子ども、それに大人たちは、それを別なものにつくりかえ、また本流を遡り逆流していくような、それでいて既に人工的に塞止められ滞ってしまっている冷たい溝のような流れの中に自らを没してしまいかねない、そんな危険な思いがあり、知らず知らずこちらも危惧を抱いてしまうわけなのです。総司令官閣下、お分かりいただけるでしょうか。何事も今は慎重に事を進めて行かなくてはなりません。閣下にはこれからも万全を期した報告書をお渡しする所存です。何とぞ、本件に関しての詳細は今しばらくお待ち下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 第四の報告

---

閣下、ここである小学校の、しかも臨時採用の男のことについてお話します。その男の名前をここでは木村としておきます。なぜ、このような話をするかと申しますと、全大的な御報告も必要ですが、時として一つの例を微細に見ていくことの方がこれから閣下がご判断される上で多くの示唆をふくむ結果になるのではと思われるからです。

木村が最初に赴任した小学校は、全校生徒五百六十、クラス数十八、各学年三クラスずつのこの地では中規模学校に属し、門から入ったすぐ右手に今は誰も使わなくなった古ぼけたモルタル塗りの用務員室がひっそりと立ち、かつての宿直室の面影を残していたそうです。木村が受け持つことになったクラスは、四年生でした。そのクラスはそれまでやや年配の女性教師が担任していたのですが、今度、以前から医者で診断されていた内臓の筋腫を本格的に治療することになり、そのための摘出手術を行うのに必要な入院と自宅でのしばしの療養期間が委員会との間の手続きのもとに承諾されたそうです。期間は約二カ月という短いものでした。つまり、木村は二か月間、その四年生のクラスを担当することになったわけです。それは、三学期が始まってすぐの時期に当たっていて、手術するのを引き延しわざわざその時を選んだのは、ベテランなりに色々考えてのことなのか、それともこれ以上延ばすに延ばせぬやむをえない事情があったのか、その辺りの内実は詳しくはだれにもわかっておりません。

木村には子どもがおり、そんな臨時採用の彼を、周囲の教師たちは物珍しがりました。二か月という短期間の臨時教員に二十六才の子もちの男がこのこやってくるのですから、どこか風変わりに映っても仕方のないことだったでしょう。とくに、その年採用されたばかりの新採用の何人かは木村を不思議な眼で見ているとのことです。と言いますのも、その時、季節は既に新年を迎え、益々風も冷たさを増しいよいよ冬一色になろうとしていたわけですが、来年度採用に向けて気の早い者たちは、その準備に取りかかり、その行為を決して早過ぎると言って片づけてしまうことはできない時期にさしかかっていたからです。一人の若い男の教師が、木村のことを今年は試験は大丈夫なのか心配してくれました。それは木村が子持ちでもあり、妻帯者であったことが原因していたのかも知れません。木村は、そんなときはきまって二つ返事で、今のところ今年は試験を受ける気は全くない旨を告げていたそうです。その教師は面食らったように驚き木村に何か魂胆か深い主義か考えでもあるのだろうという訝がる眼つきで彼を見つめていましたが、私どもが木村の性格から分析しますに、彼には大してはつきりとした思いはなかったととる方が妥当かもしれません。ただ、敢えて言えば、紙切れやわずかばかりの実技で教師に選び取られたり、落とされたりすることに彼自身納得ができないこともあったでしょうし、そんなことを繰り返すことにそろそろ嫌気が差していた、といったことも充分考えられます。と言いますのも木村はよく、その不満を妻に漏らしていたそうなのです。おそらく、その時本気で教員になりたかったのか、と彼自身聞かれれば、それさえも疑わしかったのではないのでしょうか。ただ木村はそんなことより、クラスの子どもたちとの新しい生活の方に期待を抱いていたらしいことはこちらにもはつきりと確認されています。彼には他の教員とは違い残された時間はわずか二か月しかなかったのですから。

閣下、ところで、木村が教員になって初めてやったまともな仕事は、児童たちと一緒に鶴を折ることでした。鶴とはいっても、千羽鶴のことで手術をした女性教師へのささやかなお見舞いの品のつもりでした。それと一緒に手づくりの色紙をつくり、寄書きに加えて手紙や作文も書きました。鶴は学校の空いた時間や特活だけでは足りず、家でも子どもたちや保護者につくって来てもらっていたそうです。黒板に「1000」という数字を書き込み、それを毎日少しづつ減らしていくことに子どもたちは夢中になりました。木村も子どもたちと一緒にうまく折れない子に教えてやったり、教え合ったりしていました。幸い、折り紙クラブの子が何人かいてその子たちが中心となってやってくれたそうです。

そんな中で木村は、まず学級づくりの取組として班替えをやりました。初めに、班替えの件を子どもたちに彼から呼びかけ、全員の賛成を得たのち、二学期の学級委員を立たせ、これまでどういう方法で決めていたのかを発言してもらいました。そしてしばらく子どもたち自身で話し合った後、くじ引きということに決定したのです。その際、二学期の場合、一度くじを引いた後、担任が指示しいろいろ何人か特定の者を入れ替え組み替えていたことを木村は他の教師から聞き、今ある班と席順が女性教師の意図あつてのことであることを知ったそうです。そこで彼は、子どもたちに再び問いなおしましたが、やはり替えたいという意志の者が全員であったため思いきって実行にうつしました。このとき、もちろん、木村は子どもたちに意見を聞きながら、隠れていた少数者や、見せかけだけの賛成者を見抜こうとはせず、葬っていたことを否定はできません。子どもたちの間には、大人たちと同様、何らかの力関係が在ることは眼に見えていましたし、発言権の強い者、弱い者、自分の存在を何とか認めてもらおうとする者、あるいは既にそれを断念している者と、少ない時間ではあつてもその様子から判断することはそう困難なことではなかったのですから。しかし、木村はやってみたかったそうなのです。女性教師がつくり上げたものが今在る形であるならば、それらを壊し、子どもたちの望むとおりにやってみて子どもら自らがそこから露になった自分らの姿を見、彼ら自身一度そこから木村本人や女性教師がどこに立っていたのかを見つめはじめ、そんな一瞬があるかもしれぬ……彼は、そんなことをやってみたかったと、後ほど発表する学内でのレポートにもハッキリと書いています。そのとき、木村自身、女性教師とともに子どもたちにとって、もしかすると必要な存在として再び認められてくるのかも知れない……彼は教師としての実践の狙いを密かにそう抱いていたと、決意を込めた文字でレポートの末尾をしめくくっているほどなのです。

鶴は様々な色で折られ黒板の上に掛けられていきました。一羽一羽がどこか違い、表情が異なつて見えたことは言うまでもありません。この地域では、折り紙は折る人柄がよくあらわれるといわれています。レポートによると木村は、子どもたちが持つて来る鶴と子どもらを見くらべ、どんなときにどんな気持ちで折ったのかを想像し楽しんだり、複雑な気持ちになつたりしたそうです。千羽の鶴には千の顔があることになるわけです。子どもら一人一人に、家一建一建に二十も三十も顔があるということは、何か末広がりに深まっていく不安のようなものが木村の内面を走り、彼を小波のように戸惑わせたことは言うまでもありません。鶴は、班替えもすみ、クラスの役員も決め終えた頃、完成しました。木村は、新しい学級委員二人を連れ女性教師の家へ、寄せ書きや手紙と一緒にそれらを車に積み込み持つていったのです。



## 第五の報告

---

総司令官閣下、ふたたび報告をCAN進学センターへともどします。いそがずにじっくり『ガッコウ』と『センター』を交互に見ていただくことが閣下にとりまして私どもにとってもよりわかりやすい方法であると考えからです。今回は、センターの朝の様子から始めたいと思います。

センターでは、子どもたちは、参考書やノートをつまった重いバックを手に口もとを緩ませたり、引締めたり様々な表情をしながらやってきます。動作も機敏とまではいかないまでもはっきりとした意志を示している子がいたり、そうでなかったりといろいろで、細くくびれた手足の速やかな伸び縮みがそれを物語るように、朝日を受け白金色に照らし出される長形の建物に向かい、一步一步進んでくるのです。その後ろには車窓から見送る保護者たちの影がくっきりと揺らめいていて、その先端はときには陽炎のように子どもたちの足もとにまでとどき、先の尖った透きとおった炎が冷えたアスファルトの地面や最近レンガづくりに模様がえされた遊舗道の上を嘗めるように蔽っているそうです。

ビルの入口で待っている職員から挨拶された小学生の児童などは、突然だったためか声あまり出ず、元気がないことを理由にもう一度やりなおしをさせられたりもします。センターの職員は出迎えのため玄関前に立ち、時には重い荷物にバランスを奪われ躓きそうなぐらいふらふらしてやって来る子どもたちにそうやって訓練を行っているのです。閣下、驚くことは、このような子どもたちを見て、センターの代表である片桐は週に二回だけの授業ではもの足りず、最近では現段階のセンターの学習能率に限界があるように考えているということです。かつてセンターの創設当時、人員の不足もあり週一回の学習を毎週日曜日にまとめて行っていたのですが、そのころはあれこれ理屈をつけ保護者を納得させ、子どもたちの集中を高める上でも、また職員の労働意欲を駆り立てるためにもその形が都合がよいものであると説明していたということでした。しかし、徐々に局数も増え、営業に安定性が見えてくると、現状では何としても物足りなさを感じているのが、このごろの彼の様子なのです。それを受けてかどうかはわかりませんが、センターでは数年前公共機関が週休二日制になるのを見越して土曜日もゼミ日に組み入れました。結果は予想以上の反響で、徐々に少しずつ現在のシステムが定着したのが、このCAN進学センターなのです。ところが、最近ではその体制でも、代表はなぜか不満を覚えるようになり、いつそのこと毎週全ての曜日を授業日にし、これまでのJUKUにない徹底した指導のもとに公教育に一歩も引けをとらせぬ教育機関につくりあげることができないものかと考え始めているらしいのです。といっても代表はいわゆる、「教育」というものにこだわりはなく、むしろそんな概念はこれからのJUKUにとって不要なものになるとも思っているようです。父親や母親の望むもの、それは取りもなおさず子どもたちの学力を最大限に伸ばし、今ある力以上の本人の希望する中学や高校、大学に合格させてやることであり、それを彼らJUKUに携わる者たちが外部へのアピール力として活用するだけの時代はやがて終わりを告げるだろうというのが彼の最近の持論です。すなわち、少しでも実績を上げ数字を確かなものにし、組織全体でそれに応じ拡大しながら、周囲からの信頼を勝ち得ていく。それにはもっと本質的な大衆の欲求をそそるカリキュラムの編成

が必要であると考えています。総司令官閣下、そのためにもセンターでは、常務瀬上がやはり最近、またもおもしろい案をだしていると言います。その案を代表片桐も、さらに押し進めなければならないと考えている最中なのです。それは、以下のようなものです。

センターが土曜、日曜制にしたまではよかったです。もう一つ他のJUKUとくらべ徹底した違いというものが見当たらないというのは、今申し上げました。そこで思いきってセンターをどこかさらに環境のいいところに腰を据えさせ全寮制にしてみれば、というのがこの常務瀬上の考えなのです。常務が代表とわずかに違うところは、JUKUが成績を良くしたり問題の少ない子ばかりを見ていくことそのものも、やがて終焉を迎えるだろうという点にあり、こちらにもそのことは綿密に記録されております。それは、現在抱えているこの辺境の地域における児童数の減少と公教育の現場の荒れが表面的には受験体制を変えていくことに間違いのないからでもあります。しかし反面、親のこれまで積み上げてきた価値観にそうそう急激な変化があらわれるとは考えられないこともまた事実な点があげられます。本来、自己の存在というものを人との単純な相対化以外確認できない人間の心情が、それほど簡単に変貌することを期待できないことは、代表や常務が嫌というほど知りつくしていることでもあるのです。人が一流に対して付加価値をもって向かわせないのであれば、それみよがしに、ますます一極集中がバールの内側で氷に亀裂が走るがごとく急速に展開されるであろう事態が出現することは両者とも計算済みですし、覚悟のところではあります。その中であってわずかづつではありますが、JUKUの在り方そのものが現在変容の過程にあることもまちがいないわけです。閣下に申すまでもありませんが、もともとこの辺境の地であって、JUKUの生きる道が『受験』にしかないと断定してきたことは、わかりきった常識の論理の範囲であったことはいまでもありません。それぞれに新しい教育を目指し数え切れないほどのJUKUがこれまでいくつも誕生しながら、受験体制に吸い取られ、あるいは手助けし、いつのまにか開き直ったかのように子どもたちに追い討ちをかける形で崩れていった事実が、このJUKU産業の避けることのできない宿命だったのです。瀬上は要するに、そんなJUKUが今までに収容しきれずにいた子どもたちを何とか吸収する手立てがあるはずだということを苦慮している一人だったとも言えます。代表とはまるで正反対な考えを持ちながらも彼らの言うことはセンターをさらに巨大にするという一点においては、両者とも遠い円周上で結ばれていると言わざるをえないでしょう。まず、そのような常務の実験的な試みとして職員の研修所や保養所、それに子どもたちの合宿所を兼ねた大がかりな施設ハウスがこの地域の西はずれの島に建設中であり、まもなく完成予定と言う情報が既に入手されてきております。

閣下、全てはこれからは時間が決定していってくれることでありましょう。このセンターの報告は、第一段階目を終え、今二段階目によりやく差しかかっているところです。真の意味で閣下にとって意味ある報告文になるかどうかはこれからの叙述が決定してくれることであると、私たちは、現在、考えておる次第です。

## 第六の報告

閣下、第二の報告にありました作文について、あとでくわしくお話しする約束になっておりました。そこでこの報告文では、そのことについてできるだけご理解いただけるようご説明いたしたいと思います。

最初の作文を書いた子、名前を綾としておきます。綾は、今年中学に入学したばかりの女の子で、顔立ちは非常に端正なつくりをしていて美しく、肌の色は白く一見したところその白さばかりが際立ち、周囲に感嘆と溜息の入り交じった距離感を自然に与えてしまう、そんな子です。わたくしも実際に内密に手に入れたフィルムを見ましたが、額から自然な形で下りてきて、なだらかに繋ぐことでより控え目ではありますが着実に存在を増す二つの瞳が実に印象的でした。ときには潤んだように見開かれるその瞳は、何かを訴えかけるようでもあり、そうでなくただなんとなくゆったりと先を見ているしかできない、そんな思わず息のつまってしまう、重苦しさとはまた違った意味での雰囲気醸し出されているようにも思われます。閣下、生命が起伏を徐々に変えながらもついに盛り上がることができず、そのまま弱まっていく姿を見る側に写しとらせ、それでいて輝きを全く失うことなくほのかにその閃光を引きのばすことで濃密さを増していつている、そう申せばおわかりいただけるでしょうか。私は、視察団の一員として、その少女を見るたびにそんなふうに感じます。

綾が初めてセンターによって実験的につくられようとしている『ガッコウ』というべきか『JUKU』というべきか、報告する私たちも、その差異がわからなくなっているのですが、そこに母親と一緒に姿をあらわしたのは、CAN教育センターの常務瀬上がBブロックに赴任したころのことです。わたしたちはその当時から既に視察とは別に調査官を忍び込ませ、実態を把握させておりました。調査官は瀬上のすぐ近くにいるポストをつかみ、社員になりすまし微々にわたり記録してまいったわけです。よってこれからのご報告文は、より裏側を克明に記録しきったほどの信憑性の高いものです。潜入したその男はあらゆるところに神経を配り、様々な精密機器を設置しわたしたちの模範となるべく勤勉に情報の収集に励んでくれました。

母親は、本来なら綾の弟の健一のことについて話をしなければならないはずだったのですが、姉の綾についてとにかく早急に瀬上に相談したかったらしく、センターの懇談会が終わってからもしばしば彼に会っていたようです。綾は、不登校がかさみ、出席率が低く学校の授業についていけなくなっていました。現在でもそうですが、当時、この地域の学校では、JUKU教育に負けないように小学校のうちから補習制度が取り入れられ必ず週に数時間は、放課後担任の教師によってそれを実行するよう義務づけられていました。既に教員たちは、この地では前回の紛争の後に生まれた者が大半を占めるようになり、教員の『クミアイ』組織率も落ち込み、また個々の教師の意識もあやふやなものになりつつあったのです。それどころか、むしろ受験競争の中で育った若い教師たちが大半をしめるようになると無給の補習であろうが別に疑問も抱かず、自分らのクラスから『ユウメイシリツ』の合格者を増やすことを誇りとしながら、当然のように競い合う図式が増えてまいりました。また、この地の教育にとっては信じられぬくらいの統制力を発揮する『シドウヨウリョウ』もまた、当初はその謳い文句として子どもひとりひとりの「興味

」「関心」「意欲」の三本の柱が上げられておりましたが、それがやがて「能力」「課題」「評価」というそれまでそれらの陰に引きこもっていた脇役が主役の座に取って変わるなど、徐々に正体を現し出してきたことが、初め両手を挙げ嬉々としていた教師たちもそれに気づき、対処しようとしたときは取り返しのつかない現実となってしまっていたのです。当然、補習授業の方もふれこみが子どもたちによる自由参加だったため、学習になかなかついていけない子たちより、むしろ充分すぎる学力を持つ子どもの方が進んで受講していくことになってしまったことは、なんとも皮肉なことです。その救済策として学校側は補習を受ける必要のある子だけを残していき、必要のない子は帰ってもらうことになったのですが、たちまち不公平だという保護者からの抗議が殺到し、初めのおり希望者であれば誰もが参加できるようになっていったとのことです。しかし、閣下、それに参加する子は相変わらずJUKUにも依然同じように通っていたことは明らであります。つまりJUKU産業にこれ以上追い討ちをかけられまいと『モンブショウ』がやっきとなって打ち出した『シドウヨウリョウ』の改訂と学力の弱い生徒や児童のための制度化した補習制は、結局は、出来る子と出来ない子との学力差を益々広げてしまうことになってしまったのです。結果的にセンターを始めJUKUは、いよいよその存在を確固たるものにしていくことになってしまいました。

さて、ずいぶん前置きが長くなりましたが、ようやく話を作文の件に戻したいと思います。総司令官閣下、この報告文の中心は、その少女綾が、この地域の西の島に面する『レモラ・ハウス』という施設の中に母親と弟の三人でやって来たときのものです。まず、レモラとは、小さな幻想上の魚であることを言うておかねばなりません。鱗の中に持っている吸盤を使って船底に吸いつきどんなに勢いよく走る船さえも止めてしまう、そんな不思議な力があるとされている魚です。おそらく、閣下につきましては、その躰の小ささからたくさんのレモラが、中央に背骨の張った滑らかな船底に、あたり構わずびっしりと吸いついてヒレやエラを懸命に動かし流れに逆らおうとする姿が思い浮かんでこられることでしょう。相手が船でなくとも、この場合小判ザメのようにあちら側が同じ魚であることも十分に考えられます。レモラは別に『ショウガイ』という意味も持っているそうです。順風万帆に進む帆船に螢光塗料をたっぷり吹きつけたように青白く光を放すレモラが群れを成します。閣下はご想像がおできになりますか。魚鱗を浮かべたレモラの群れは月の光を受け、海面を鮮やかに疾走します。レモラは止める力だけでなく周囲のものを呼び寄せてしまう力も持っているのです。快調に走るかに見える船は実はそうではなく、彼らが予期せぬ方角へと進んでいくのがその真実の姿です。彼らには、彼ら自身を止める力はありません。レモラは、そんなとき闇夜に水飛沫を上げ、人知れず輝きを増すのです。

センターがつくろうとしていた保養所を兼ねた合宿所に、この名前をつけたのもやはり創案者である常務の瀬上でした。彼は、既に申し上げましたとおりJUKUという産業にかかわりながら、いずれ今の形での経営状態は終わり、自らの力で何とか今の教育の流れを変えてみたいと考えている人間の一人でした。そのため彼は代表の片桐を要所要所でうまく使い、なんとかここまで漕ぎ着けた観さえあります。と言っても彼は、センターそのものを消滅させようとしているのではなかったようです。これから別の形でのJUKU発展を見た場合、やはり自分が思っていることが最も理想的な方法であると信じ込んでおりましたが、それを実現するにはやはり豊富な資金源と人材を持つセンターが必要不可欠な存在であるとも考えていたのです。

さて、その日、調査官の言葉に従いますと母親は、綾の相談にいったとき、海が見渡せるこのハウス自慢の総ガラスに覆われた三階ラウンジで瀬上と会っていたということです。瀬上はソファにゆったりと腰かけ外の景色を見つめていましたが、日を浴びてできる表情の陰りが感慨深い様相を呈しながら、彼はふっと溜息をついたと、記録には表記されています。合わせて母親はどこか疲れたような、しかしそれを相手に気づかせぬ口調で、しきりに常務に何かを訊ねていたと申します。瀬上は、ソファからゆっくり立ち上がると母親の方を振り返らずに、そのままりノリウムの敷きつめられた床を靴先で確かめるようにかかるく蹴ったらしく、おそらくそのときは、甲高い音が二人の間を掠めると同時に他に誰もいないラウンジに響き返ったにちがいません。瀬上はそのときなにかを綾の母親に告げました。母親の方は、まだ内に持った疲れを丁寧に解きほぐすように足を組み直し、わだかまりがもしあるとするならば、その足先から玉つづきとなって零れ落ちてくるようであったとその調査官は私へも熱心に報告してくれました。

母親がつぎにだしたある言葉のあと、常務は初めて驚きの表情でふりかえったそうです。彼は、母親のおそらくは叫ぶだけで泣き崩れることはないであろうある種の強さを含んだ、濃い眉が中心をしめているように思える、その顔をまじまじと見つめていたそうなのです。瀬上にはめずらしく、苦虫を噛みつぶしたようなうつむいた表情だったとも言います。二人の話が会話という

には、あまりにたどたどしいものだったことは、調査官も語ったことですし、後で提出された文書にもはっきりとそのことは明記されています。知らず知らず過ぎ去った年月がそのぎくしゃくした隙間にできた空洞に暗い闇のように感じられるようだった、と細かく比喻をこめて書いてあるのです。母親と瀬上とがどんな関係だったのか、私どもにもくわしくはわかりかねます。ただ、そのときの心理が、あまり思い出したくない気持ちとは裏腹に、これまでに過ぎた年月をまるで嘘のように体感しながら躰の奥で笄し弾け散っていく心地ではなかったか、それとも、けっして容易には拭い去れない過去が泥濘のようにしてあったのでは、はたまた、目の前の硝子窓にある眼に見えない一点を見つめるような無明を差す言葉がつづいていったのではと、こちらはこちらなりにいろいろと想像するだけです。

そんなふたりの間に暫く沈黙がつづいたときも、海はすぐそこにあるのに波の音は厚い断熱硝子によって遮断され、とどいて来ないつくりになっていました。それがかえってふたりの間に苛立たしさを覚えさせたのでしょうか。海岸線へつづく道路とを挟んで拵えられたかなり広い前庭には人夫たちが、おそらくこのハウスの最後の仕事とも言える芝張りをやっていたらしいのですが、踞んだ後ろ姿が適当に散らばりながら小まめに前後に移動していた風景をふたりは耐えるようにじっと見つめていたそうです。

瀬上は、ソファアから身を乗り出すようにやや背を倒し、膝の辺りで手を組み、ゆっくりとあの作文の趣旨を母親に説明しはじめました。

## 第七の報告

---

総司令官閣下、この記録が、綾と健一が好きな海岸の砂浜へ遊びにいつているときのものであることを前もってお伝えしておかねばなりません。そうです、あの作文を書いたセンターの二人の生徒は、その母親の子どもであり、姉弟だったのです。そして、この作文に関する訓練は、瀬上と母親のふたりで始められたものであることもお知らせしておかなければならないでしょう。

まず、瀬上が、彼にとって生徒である姉弟にあのような作文を書かせたのは、自分一人の考えでやったわけではないことをそのとき母親に伝えたいことが調査によってわかってきました。そのとき、R地方進出へのより強い基盤をつくるために、センターでのテーマは 虹 と 滝 のイメージに絞られていたのは事実です。そこで、それに見合った内容の作文が必要とされ、会員数を増やすためには、説明会でその成果を出すことが求められていたようです。その場でどれだけ両親たちを説得し、入会したときの価値を信じ込ませるか、そこに事業のすべてはかかっています。そのために彼らは、最初から両親たちをも自分たちの術中に治めるために綿密な計画を練らなければなりませんでした。つまり、集団催眠の要領です。そこでそのときの説明会では、とくに常務のねらいとして新しい試みをやりたかったのです。それは、いつものそれなりに出来る子の受験パターンだけではなく、かつて学校を不登校になり、排除されたかもしくは自ら拒否した子どもらがセンターの指導によって立ち直り、それだけではなく立派に中学にも行けるようになった、あるいは有名中学や高校への合格も果たしたとなれば世間はどう思うか。そういったところを狙い、これまでJ U K Uに批判的だった者たちやマスコミに対し今まで以上に新しい評価をセンター自身に下させることは可能ではなかろうかと、そう彼らは考えていたのです。

この母親は、そのようなセンターの思惑をまったく知りませんでした。もしかすると、そのとき母親は、娘や息子が通い、彼らに与えられていたセンターの学習内容の真否をはっきりさせたくて、わざわざ瀬上と話をしていたのかも知れません。たしかに姉も弟も、少しずつですが、センターの設定した規則の中で生活するにつれ、徐々にリズムを取り戻してきていたことは、何をかくそうこの母親自身が最も明確に気づいていたことだったのですから。しかし、そこにはむしろそれまで持っていたふたりの子どもの生き生きとした表情が消え、暗い夜更けの海のように沈み込んだ印象がどことなく生まれてきていることも感じられないでもなかったようです。閣下、報告によるとふたりの子どもに母親が望んでいたものは、そんな表面的なものではもちろんありませんでした。もしかするとセンターのために自分の娘や息子を試験材料に使われたのではないかと危惧した母親は、しばらく子どもたちの精神的な回復を素直に喜べない悲しみにくれた可能性さえあります。母親にその時点でどうとられようが、瀬上には彼女に対し、納得のいく説明ができないことは、閣下にも充分わかっていただけることでしょう。二年前、この母親と偶然センターで会ったとき、その娘の話が彼女から瀬上は聞きました。小学校四年生のころから学校になかなか行こうとしなくなったということでした。それらは細かく、記録にも書いてあります。その前兆はそれまでにあったにせよ、母親が娘に理由を聞いてもその内実はわからなくなっていたそうです。いじめられているのではないかと心配になって学校を訪ねても担任はこっちは別に問題はないと言って逆に彼女を突っ撥ね、反対に家での教育の問題を上げてきたと言いますか

ら驚きです。頂度そんなとき弟の健一が、どこから聞いて来たのかセンターのことをしきりに母親に口にし始め、自分もぜひそこへ行って勉強してみたいと言い出したのがそもそもセンターにこの姉弟がきはじめたきっかけなのです。

健一がセンターへ通いはじめてから最初の教育相談に行ってみたとき、母親はわずかながら期待を持ち、興奮し、血液の鼓動が少しばかり早まったかのように蒼ざめていたと記されています。洗練された言葉づかい、磨き上げられた建物の内部、厚い接待と熱心な相談、どれをとってみてもそれまで母親が経験したことの無い教育サービスだったことが一因していることでしょう。ここに娘と息子をまかせても大丈夫なのではないか、そう母親が思っても少しも不思議でなかったわけです。そしてこれはもうひとつ重要なことですが、八年前、突然蒸発してしまった彼女の夫の面影も瀬上には、かなり多くふくまれていることを母親はしみじみとある友人に漏らしているということです。八年間も姿をくらましていた自分の夫とそっくりの人物が澄まし顔で待っていて、『こちらへ、どうぞ』と言った驚きを、閣下、まさしく心の臓が抉られるほどであったと表現してもけっして言い過ぎではないでしょう。母親は、興奮を抑え切れぬように唇を噛んでいたそうです。しかし、それからは母親の凄さが調査官の目を引きました。母親は、動揺を周囲に気取られぬよう、息子のことよりむしろ娘のことを涙ながらに喋り出したそうなのです。さすがの瀬上もそれには敏感になにかを察知したらしく、自分がまるで彼女にとって身内のものかだれかで、うらみでも晴らされているようで芯からゾツとしたと、のちに部下の一人につぶやいています。母親のあまりの興奮ぶりに、彼はついつい苦笑してしまいそうにもなりましたが、不謹慎に思え、それはできなかつたとさらに備考欄にはあります。

それから母親は弟の健一をセンターにやり、一年間もの間、教育相談のたびに講師と保護者という形で瀬上と会っていたわけです。ふたりの関係が個人的なものとしてさらに発展していったのかどうかは、まだ私どもにもわかりかねます。ただ、はっきりしていることは、母親が、瀬上にもし抱きはじめてたとしても不思議でないその特別な感情を、彼女は彼にそれまで一言も言いたさなかつたということです。ここからはわたくしの想像ですが、瀬上は、もしかするとそのとき『レモラ・ハウス』でそのことを告白され、その返答に困っていたのかもしれませんが。もしそうだとするならば、母親も本気だったはずです。彼女はしばらく躊躇した後、決心したように言葉をついだと思われます。

総司令官閣下、ここで確認しておかねばならないことは、そのとき彼女自身、瀬上に申しわけなく思っていたところがなくもなかつたということです。確かに瀬上は、おそろしいほど彼女とふたりの子どもを置いて消えた男に似ていることは事実でした。しかし、それもこれも勝手な母親自身の思い込みにすぎなかつたようです。ただそのことが、ついほかの他人に相談しないことまで彼に持ちかけるきっかけをつくっていったとしても否定はできないことでしょう。母親の発言の記録がそのことをつよく物語っています。夫がいなくなつてから一人になるといつも、彼女は、考えていたそうです。一緒にいるとき、ほんとうに夫の気持ちを考えたことが一度でもあったかどうかをです。いつも口喧しく教員試験を受けて通ってくれと、そのことばかり言っていたのではなかつたか……。彼女の夫は小学校の教員をめざしていたらしく、臨時採用にはいくのですが、あるときから試験をパタリと受けようとはしなくなつたと言います。その頃は実際に彼女からみて、夫がほんとうに小学校の教員に向いていると思っていたようですし、一日でも早くなくなつてほしいと願っていたことは確かです。しかしそのことも、よく思い出してみると生活のことしか考えていなかつた打算的な自分の姿が見えてくると彼女は述懐しています。そして夫が、一つのことをやり出すとほかのことは何も考えられなくなる人間だと知っていて、彼女の方も

ますますムキになりやり返していたようです。まるでそう言うのが妻としての役目だと信じているほどにです。そして、彼女の方から夫に、自分の本心、つまりもう教師になる気がないのならなくてもいいということと言わなかった最後の理由は、やはり夫がいつか自分の口から直接彼女に、はっきり教員になる気がないことを話してくれると信じていたからだとも調書には書いてあります。ある学校の退任式の日から突然、夫が目の前から消え、八年がたち息子の健一がセンターに通い出して一年を経たとき、瀬上という相談相手が出現しました。彼にじっくりそのことを話せるようになったことは、彼女自身、正直嬉しかったことではないでしょうか。待っていた甲斐があったと感じたかもしれません。

それからは瀬上の言うことを信じて、彼女は週に一度、この建物にふたりの子どもを連れて来るようになったのです。母親の方も最初は、おそらく瀬上が、自然に囲まれた雄大な場所でふたりの子どもたちと会って話をしたり遊んだりすることを楽しみにしているのだと思っていたふうに考えられます。現に、子どもたちは喜んでいましたし彼女の方も、まるでこれまでの時間を取り戻すかのように、彼の言ったとおりにしようと思い、勉強時間も、寝る時間も話す内容もここでの生活はすべてセンターで決められたとおりにやってきたのでした。娘を立ち直らせようと彼女も弟も三人で必死にがんばってきたのです。そんな話をしている途中、母親の躰が少しづつですが顫え始めた記録には明記されてあります。もちろん、瀬上自身も充分感じとっていたはず

です。

やがて常務、つまり瀬上の重い口がやっとひらき、最初にでたのは詫びの言葉だったそうです。ただ、その内容は詳しくは書いてありません。しかし、想像はつきます。閣下、ここからはわたくしの憶測で思うところを少しばかり書かせてください。瀬上は、自分は君たちを騙そうとしてこんなことをやってきたのではない。そのことだけはわかってほしい、そう言ったとも考えられます。彼も自分の生徒を立ち直らせることで精一杯だったのですから。母親から綾のことを相談されたとき、仕事とはいえ責任を感じて随分苦しんだことはわたくしどもにも痛いほどにわかります。もしかして、子どもがそういうふうになったのは幼いときに蒸発した、その父親が原因ではないかと他人ながらも考えたかもしれません。いや、おそらくそれも大きな理由の一つだったでしょう。とにかく、真面目な瀬上は自分なりになんとかしようと思ったのです。学校が駄目なら自分の手で、そう彼は考え、幸い、センターで瀬上は長年計画していたことを実行しようとしていたときでもありましたので、それを取り敢えずやってみようと思ったふうであることは、資料からも頷けます。つまり、綾のような子たちをここに呼んで教育して、再び社会の前線へ連れていけないかということなのです。もちろん閣下、JUKUはそれ自体企業体であるわけですから営利の追及を怠るわけにはいきません。そこで、わたくしどもが考えるのは、その辺を旨くやりくりして押し進めながらやっていこうというのが瀬上の思惑だったのではないかということです。少しでもセンターが今と違った何か別のことを始めていけたとしたら、それが弾みとなって現在の受験だけにおぶさった子どもたちを餌にする、そんなJUKUや学校の在り方も少しはましになっていくのではないかと、そう彼は思っていたようなのです。そこで、まず綾を教育し始めました。彼女がここに来て週に一度受けていた授業は、瀬上たちがデータを提供することを条件に手をむすんでいる医者スタッフと、センターが独自に研究を進めてきた学習カリキュラムとを繋ぎ合わせたメニューだったのです。母親も作文を読んだとき、少なからず娘が、いつのまにあんな作文を書けるようになったのかと意外に思ったことを我々調査団も、看過することはできません。

しかし、母親は、たまりかね、叫ぶように言ったと次の記録にはあります。

綾や健一をとおして、世間の現実を知っている母親にとってセンターがやろうとしていることは、まるで御伽噺の世界だったのですから……。そんなことを今望んでいるのは、センターにつとめる人間だけではないか、そうも思ったことでしょう。娘の綾に必要なのはそんな大それたものではなく、父親それ自身であったとも考えたのかもしれませんが。父親がいなくなってから確かに綾は、少しずつ変わっていったようです。まだあのとき五つだった綾ですが、母親の目からもわかるように感じ取っていたはずです。母親は母親なりに、一番悲しむべきは彼女よりむしろ娘の綾だったのかも知れないということを実感していたようなのです。

父親がいなくなってから、弟の健一をなだめたり、母親に気を使ってくれたり、綾はほんとうによくやってくれたそうです。周囲の大人たちが呆れるぐらいにそれはつづきました。母親の父親、つまり綾の祖父が死んだときも、孫である彼女は涙一つ見せずに親戚たちに心配をかけまいと気を張っていたと言います。たった小学校三年生の彼女がです。閣下はご想像がおできになりますか。しかし、綾にも我慢の限界が来ていたことは確かだったのでしょうか。少しずつ無意識にムリが溜まりに溜まっていはずです。弟の健一は、何にでも興味を持って夢中になれる子でそれほど心配はしていませんでしたが、綾はどこか違っていたそうです。いつも何か、考えごとがあるような、そんなところがあったと報告書には記されてあります。だからこそ、彼女は日頃からよく、なんでもいいから娘に対し、彼女の思っていることは自分に話してくれるよう、口が酸っぱくなるぐらいに注意していたそうです。また、そこが自分の悪いところでもあったと、母親は反省と回顧を込めて述べていますが……。しかしついに、綾は、微笑んでいるだけで何も彼女には打ち明けてはくれなかったのです。一言で言えば、自分の努力が足りなかったのだと母親は、最後に瀬上にそうつぶやき後悔したと、調査官は、直接わたくしのもとへ出向き伝えてくれました。そのときです。閣下、手もとの記録には「後方で扉の開く音がした」と書いてあります。風の音のようでもあったかもしれませんが、壁と硝子によって締め切られ、まだ出来て間もない金属の匂いの立ち込めるその部屋に、そのような現象が起こるはずもありません。常務と母親は、椅子に座ったまま振り返りました。

ふたつの影が、西日に黄金色に染められ、細長く壁に垂れながら、そこに映し出されていたそうです。

『綾と健一が、浜辺から帰って来ていた』

記録の最後の言葉はそこで終わっています。

総司令官閣下、以上が作文のことに関する我々の調査のおもな内容です。

## 第八の報告

---

総司令官閣下、この地域の学校では人権集会というものがときどきあります。臨時採用教員である木村が二番目に赴任した学校でのことです。そこは担任の教師が眼の角膜に穴が開くという重い病気にかかり入院し、約半年間彼がその教員にかわって勤務することになりました。木村は、五年生を担当しました。

人権集会は毎年一回行われています。児童たちの『イジメ』をなくし、『サベツ』をなくすために行われています。各学年、各クラス、それぞれに工夫した教材を使い準備のときから時間をかけ子どもたちと進めていくわけですが、それでも足並みはなかなかそろいません。それに反対する一部の教師たちもいるからです。閣下、子どもたちに協力したり、まとまることを表面では言いながら、それを実践する教師たちが支え合えないとはなんと皮肉なことでしょうか。ほとんどは教材をもとに作文を書かせたり、劇をつくったりし、いじめたり、いじめられたりした経験やそれへの取組みを全校児童の前で発表させたりするのですが、そのとき教師は少しでも強引な手を打ってはならないことは閣下にもおわかりいただけるかと思います。子どもたちが自分から発表すると言うまで、ただ語らいをやりながら待つしかないのです。

正直なところ、木村自身、今思い出してみてもその短い赴任期間にどこからどこまでが人権教育で、その実践であったのかたずねられたとした場合、はっきり答えることはできないはずです。その頃の毎日の彼の行動は、全て教員になって初めての試みでもありましたし、考えようによってはそのほとんどが彼を含めた子どもたち自身にとっての人権とは何かを否応なく突きつけられ考えさせられる日々であったとも言えなくもないからです。また、そうでなく、まったくそこから遠くかけ離れた健全で新鮮な毎日を過ごしていたと言え、まさにそのとおりとも言えるでしょう。それは、はっきり申し上げて今は彼自身どちらとも言えませんし、そのときどきある一方へ傾いていたにせよ、自己満足の度合は相当なものであったろうことだけは推察されます。

閣下、どの職場についてもそうでしょうが、彼にも、いくつかの忘れられない出来事があるようです。

彼はそれを、ことあるごとに校内での研究会でレポートをしてきていました。一つは家庭訪問に行った時の事です。訪問のきっかけは向こうからやって来たそうです。かつてよく、いじめられていた女の児童の母親が、娘が最近またいじめられているようだ、他の親から聞きつけ心配でやって来たのです。実際に木村が見たところ、最近とくにいじめられているといった様子は、その子にはありませんでした。その児童には、人権作文を書いてもらって以来、木村も彼女と少しづつ会話を持つようになり、これからはお互いに弱いところを変えていこうと約束し合っていたところでもあったので、母親の訪問は、寝耳に水といった突拍子のない感覚を持ちました。そこで彼は、その時は彼女の最近の様子と、母親の会話の中に出てくる他の女の子二人の様子などを話し、仲良く問題なくやっていることを伝え、向こうも、それならば思っていたほどのことではないと幾分安心して帰って行ったとのことでした。

ところが、木村自身、そこだけの立ち話では納得がいかず、本当のところは彼一人が気づいていないだけで、実は彼女へのいじめは今もまだつづいているのではないかという不安も強まってきました。とにかくもう一度、彼女とじっくり話をしたい。彼はそう思い、児童の家を訪ねることにしたのです。

約一時間ほど木村は、話をしたと思います。母親も一緒でした。女の子は、最初なかなか口を開けようとしてくれませんでした。後の方になってようやくぽつりぽつりと話し始めました。悪口を言われたこと、除け者にされたこと、今でも遊んでいるとき、ときどき自分だけ仲間はずしにされ、相手にされないときがあること……。これまで学校でのそんな娘の様子を直接本人から聞いたことなかった母親は、その児童の隣で黙って頷きながら涙を浮かべていたそうです。彼女は、しばらく話したあと黙り、木村がもう一度彼女がつき合っている女の子たちに声をかけてみることを約束し、そろそろ帰ろうかと立ち上がると、それをまた引き止めるかのよう小さい声で話し出し、すぐにまた黙り、しばらくしてまた彼が立ち退くそぶりを見せると、ぼそぼそと話し出す、そんな様子だったと言います。

次の日、他の子どもたちが音楽室へ行っている間に、木村は彼女を除いたいつもの遊び友だちを教室に残し話を始めました。

まず、なぜ、木村は自分が彼女らを残させたのかその理由を聞いてみました。三人は、すぐには返事をしませんでした。木村本人が彼女の家へ行ってきたことを話すと、黙っていた子たちもようやく交互に重い口を開け始めました。ジャンケンをして負け、自分が鬼になるといつもいじめてしまうから、こちらがいじめていなくともいじているように見えてしまう。それが三人の一致した言分でした。彼女はたしかに躰も大きい方でなく、むしろクラスでは小さい方です。運動も、さして活発にできるわけではありません。彼女にとってジャンケンで負け、鬼になり追いかけたりボールを取ったりすることは、他の者が軽く受け流す以上に辛く、楽しいものではなかったに違いありません。同じ一緒にやる遊びの中にも、その中に常に弱い者への配慮がなければ、たとえその発端が悪気のない無邪気な気持ちで始まったものだとしても、つい、いつのまにか力のない者を除け者にしたり、ちょっとしたいたずら心が生まれ予期せぬ方向へ行ったりするものです。閣下、報告をする私どももそうではありませんか。それほど弱い者は相手の小さな行為にまで神経を配り、気をあれこれ回しているのです。

木村は、彼女を入れ四人で、その日の放課後図書室を使い話し合いました。彼女には、自分のことをマイナスにとらず、考えや気持ちを自信をもって言って欲しいこと。そして後の三人にはそんな彼女の言葉をこれもまた、あたりまえに耳を向け、対等にやってほしいことなどをです。

やがて、木村がその学校へ来て半年が過ぎようとしていたときに、もう一つ忘れられない出来事が起こりました。一人の男子児童が屋上でちょっとした騒ぎを起こしたのです。その日、木村のクラスでは彼の サヨナラ会 を催すための学級会が行われていました。プログラムや彼への贈物まで決めるということで、木村には見に来ないで欲しいという学級委員の言葉を彼自身、悪い気もせず承知し職員室に残り、研究紀要に記載する資料まとめをしていたそうです。

木村は、それでも職員室にいつまでもいるわけにはいかず、そろそろ出かけ、教室の後ろからこっそり覗いてやろうと思い、職員室の扉を開けました。頂度その時です。クラスのある子が息引き切って一人廊下を駆け、慌ててやって来たと言います。何でも、ある男の子が学級委員と

言い争い、家に帰ると叫んでそのまま出て行ったらしいのです。その子は、母親との二人暮らしで喘息の病気があり、欠席が目立つ頃はおとなしい子でした。木村は、勉強の遅れを取り戻させるためよくその子の家に足を運び、休んだ日には、もちろん顔を見にっていました。その子が今、出て行ったと言うのです。

木村は下駄箱へと急ぎました。靴はまだそのままにしてあり、彼は、ホッとして今度ははやる気持ちを押しさえながら教室へ駆けもどりました。教室には、その子と男子児童の何人かが姿を消し、見当たりませんでした。木村は一瞬戸惑い、教室全体を見まわしふり返りました。その時、いなくなっていた中の一人の児童が突然、木村の視界の前に現れたのです。その子は、他の子たちは屋上にいると叫びました。屋上で男の子が自殺しようとしていると。木村は、それを聞くと間髪を入れず、その子に有無も言わせぬ勢いで肩口を掠めるようにして教室を出、屋上へと向かいました。屋上の鍵が壊れていたことは、前の日にも職員会議で問題になったばかりです。捨て猫や子犬らを拾って来て、給食の残り物で子どもたちが飼っていたということも上げられています。だが、そのとき彼の頭には、その子がとにかく無事であってくれることを願う気持ちしかありませんでした。

吹き荒ぶ南風の中に躰を弄ばれるようにして、子どもたちはいました。白い鉄のフェンスから身を乗り出そうとする男の子を他のふたりが両側から取り押さえています。木村はそんな子どもたちに感謝しながら上から覆いかぶさるようにして抱き着いたそうです。やがてクラスの子たちの足音がし、全員が血相を変えてやって来ました。何人かの女の子らは、涙で瞳を腫らしていました。木村は、大声で全員、教室に帰っているように注意しました。そのとき彼の腕の中にいるその子は、何かを必死に耐えているようでした。屋上が見える位置にある教室や運動場では、授業は一時中断され、教師が、そして幾人かの児童が教師に叱られながらも窓越しに顔を突き出すようにして木村たちのいる方を見上げていました。遥か斜め下の職員室の窓の向こう側にも、気づいてか気づかないでか、校長と教頭の顔が小さく二つ並んでいるのが、彼にはよく分かったはずであると最後に記録には書いてあります。

## 第九の報告

総司令官閣下、この地域の地理的象徴でもある内陸の湾岸に沿った、私鉄R駅の正面から道路に面した西側に、CAN進学センター・R局があります。証券会社と化粧品会社、最上階には保険会社が雑居する建物の三階に大小四つの部屋が移動式壁板で敷きいられ、そこへ小学、中学合わせ八十六名の生徒が、土曜日と日曜日とを中心にそれぞれ決められた時間帯にやって来るのです。これから申し上げるのは、あの説明会からちょうど一年たった現在の報告になります。

さて、八十六という数字は、今のところセンターの中では最低のようです。現在勤める四人の講師のうち、唯一正式な男性CAN職員である柏木という男が、いつかそうこぼしていたと私も聞いております。職員は、その他に、主に小学校低学年の国語と事務の担当の杉野という女性だけで、あとは雇われ講師三人を含め、女性の事務アルバイトの全部で六人という、センターの中にあっては実に小じんまりとしたものです。

R局を見ておきますと、なんとかいまのうちに策を練らないと営業上困難になっていく様子が、ひしひしと伝わってくるようです。R局がセンター八番目の局として開講を始めて、既に一年が過ぎようとしているのですが、当初は予想を上回り、伸び率も上位にある時期もありました。しかし、その後徐々に落ち込みだし、最近では会員数でも最低を記録するまでになっている次第です。結局、子どもたちの成績の伸びが今一つだったというのが全ての原因をしめているようでした。それにより、口コミでの評判も奮わなかったというわけです。ある日、柏木が、R局でもこうなったら、墨塗りでもやっていくかと冗談とも真面目ともつかぬ顔で言っていたと聞きます。そのとき杉野は、頂度本部にファクシミリで企画案の資料を送っている最中でした。墨塗りは、質問に答えられなかった子たちの顔を文字どおり黒い墨で塗るといふ何とも言えぬこのセンター独自の、まさしく罰の象徴のようなもので、見ている方がかわいそうになってきて直視できないと、思わず一人の調査官が顔をしかめ漏らしていたほどのものです。

そのとき、また一方では講師の中の一人が、どこの局のものかわかりませんが墨塗りの授業風景を撮った写真を一枚見せてもらっていました。頬に筆太く髭が描かれている者、眼の片方だけが黒い隈に囲まれている者といろいろあります。今、R局にいる生徒の勉強状態でこれをここでやったら、大方授業が終わる頃までには、全員顔が真っ黒になっているのではないのか、冗談とも皮肉ともつかぬ言い方をその講師はしていたそうです。周囲に笑いが起きなかったのは、まんざら当たっていないこともなかったからでしょう。だが、勉強は間違いなくやってくるようになるはずであるというのが、キャップ柏木の考えでした。彼は、机の上に置かれた写真を手に取りしげしげ見た後、さっきの講師の男に軽く視線を移しました。相手は、現役の大学生です。柏木は、相手のそんな何でも簡単に言い切ってしまうところがどうにも癪に障たらしく、はたから見ていても苛々しているのがわかるほどに刺々しい言葉を知らず知らず放っている様子だったと言います。閣下、柏木もCANの各局キャップの中にあっては最も若い、二十八歳の青年に過ぎなかったのです。CAN進学センターには、三つの訓戒があります。それは、かつてはどの局でも毎日、朝礼時に全学年の子どもたちに唱和させていたそうですが、今は、もうほとんどの局でなくなっています。

総司令官閣下、ためしに閣下も一度ご唱和していただければ、この雰囲気なり信条をお伝えできるのではないかと思います。無駄なことかもしれませんが紙面をさいてお載せたいと思います。

その一、CANは、己れである。己れに勝てぬ者は、CANにはなれない。

その二、CANは、努力である。努力なき者は、CANにはなれない。

その三、CANは、可能性である。可能性を信じぬ者はCANにはなれない。

そして、職員だけに配られる黒いビニール製の厚い手帳の最初の開きには、かつて研修のたびごとに頭に刻みつけられた社員用の一文も載せられています。

子どもたちをCANNOTからCANへ。それが我々の使命である。

このような文を大声を上げ叫ばせているだけで会員が増えていた時代も、もう終わりを告げた。これが、この若い局長柏木の常日頃思っていることでした。柏木は、いつものとおり打ち合わせの後、手帳を上着の中へ仕舞うと事務所と職員室を兼ねた、今いる自分たちの部屋の壁にぎっしりと貼り出されている今年度の全国ユウメイシリツ中学や高校を始めとする地元進学校らへのセンター内での合格者の書かれた紙の上にゆっくりと眼を馳せ、一字一角を見逃さない熱心さでたどっていました。そこには、つい先日まで彼自身がこのR局で英語を教えていた見覚えのある名前もあるにはありましたが、そのほとんどが他の局の顔も名前も知らない生徒たちばかりです。しかも、その中にはセンター全体で春、夏、冬一斉に毎年三回に分けて行われる模擬テストだけを力試しに受け、結局は入会することもなく、一度も授業に出ることもなかった子どもたちがかなりの数ふくまれています。その日も、柏木はいつ切れるともないそんな杉野が自慢としている達筆な字で記された名前の羅列を不思議と倦むこともなく、むしろいつもより平然とした気持ちで眺めていたのです。そんな柏木を心配したように杉野が、何か所在なげに聞いたとしてもむりもなかったかもしれません。だれもがふと、空しさを覚えることはこの局にあっても充分考えられますし、そして現実に存在することでしょう。

そのとき、次の週から行われる新期のゼミの打合わせにやって来ていた三人の講師は、さっそう帰る準備を始めていました。引き上げていかどうか小声でたずねる講師たちに、柏木は、労をねぎらう言葉といっしょに教材研究を充分にやっておく忠告を忘れませんでした。講師たちは、鞆の中に各自必要な参考書類などをつめ込むとそれぞれに挨拶を言い終え消えていきます。学生もいれば、フリーのアルバイトもいます。弁護士を目指して勉強中の者もいました。それぞれに三者三様といった感じがします。思い起こせばそこにいるのは皆、一年前、開局の準備期間中に柏木自身が近くの大学や職安に募集をし、彼自らが面接をやり決定し、講習会やゼミ期間を通じセンターのノウハウを教えていった者たちです。柏木は、その質にはどこにも負けない自信

がありました。ある局によると大学の医学部生ばかりを集めているということも伝えられていましたが、柏木はそんな方法を極度に嫌いとうとうとはしませんでした。彼が講師たちを選ぶ最も大きな条件は、その経歴や見た目ではなく、いかに子どもたちを教育していきたいかという、熱意の方でした。様々な枷の中でも、とにかくここにいる間はCANの職員としてどれだけ子どもたちと接していくことができるか、それにすべてはかかっていると彼はとらえていたからです。そのためには、多少一癖あろうが眼はつぶる。柏木は、そんな講師たちのみを求めていました。しかし、今回R局は、センターの中にあっては惨敗であったのはだれの目からも明らかだったようです。会員の伸び率は、おそらく他の局と比べ最低であることはいずれははっきりすることでしょう。そもそも講習会からして、参加した一般者への加入を決定づける要素がもう一つ不足していたのではないかというのが柏木の見ているところでした。

柏木に、杉野はまだまだこれからですよとわりと淡々とした調子で、しかし彼女特有の闘志を内に秘めた声でつぶやいたのは、そのような状況から言っても当然だったかもしれません。そのとき電話のベルが鳴りました。杉野がすかさず受話器を取り、彼女は一年経って板に着いた柔らかな口調で対応しました。その日は、事務のアルバイトの女の子たちは社休日に当たっており、家で骨休みしているところだったのです。

電話は、センター代表の片桐からでした。柏木は彼女に促され、観念したように腕を伸ばすと点滅する保留ボタンを押しました。しばらく挨拶程度に話し、実績が奮わなかったことや、センターのR局へ今回新しく要求してきたカリキュラムの多少の無理と困難さと、そこからでた保護者の戸惑いなどを受話器をとおし伝えました。最後に『オツカレサマデシタ』という、閣下、すでにご存じかと思いますが、この地域独特の挨拶言葉をつけたすことも彼はわすれてはいませんでした。

ときがときだけに、柏木が受話器を置くと同時に、隣にいた杉野がすかさず電話の内容をたずねてきました。

柏木が言うには、代表は、このままの調子でやってくれ、と比較的明るい声だったそうです。彼も拍子抜けしたように呆れた表情をしています。それから片桐は今度、R局にきたとき一緒に食事をしようとも誘ったと、杉野の顔をまじまじと見ながら言いました。杉野は、代表があまり細かい数字とかこだわらない人だから、よかったのではないかと柏木に笑顔で返していました。彼女にそう言われても、柏木にはどうも腑に落ちないことがありました。考えてみれば今回このR局の運営そのものには不審な点が多かったのです。

まず第一に、柏木よりキャリアも豊富で年齢も上をいっている者が、センターには彼の他にもたくさんいました。そんな者たちを差し置いてまだ入社して間もない自分がこの局のキャップに抜擢された理由が、そもそも柏木には不可解なものでした。それに、今回提示されたカリキュラムです。一見しただけでこれまでと違っているところは、ゼミの中に合宿が一期ごとに三回づつの計九回も取り込まれているという点でも明らかです。そのことから、その無謀さは不審感となるほどに極点に達していました。それぞれ連休などを利用してスケジュールを組んではあるにはありますが、余りに強引すぎるとしか言いようがなかったのです。しかも、その会場が『レモラ・ハウス』という聞き覚えのない施設であることも柏木にはどうも気になります。西の小さな島に研修所を兼ねた子どもたちの合宿所が現在建設中であることは、彼も連絡を受け知ってはいましたが、しかし、東部地区のことを考えた場合、何もわざわざそんな場所につくらなくともよかったはずで、将来的には、もっと増やしていこうという心積もりなのではないでしょうか。柏木の疑問はふくらんでいました。

柏木は杉野にそのことをたずねてみました。何か彼女も同じようなことを感じているのではないのかと思ったからです。彼女はそれでも最初は、あまりピンときていない様子でした。柏木はていねいに補足しました。

つまり、それはこういうことです。今回一年間、このR局の運営をやってきて結果的に八十六名の生徒が来週から始まる新年度のゼミに継続してくれたわけですが、けっして数字はよくなかったにもかかわらず、代表である片桐は、それで上出来だと柏木に電話で告げてきたのです。思えば、あれほど説明会や懇談会にも力を入れ本部からも多くの動員を駆け出発したR局です。今までどの局にもなかったほど力を注ぎ込んでいたことは他の局と比較しても周知の事実だったことでしょう。その後、いくつかの難関を万全を期してのりきって来られたのもそれらバック・アップの体制があつてのことだったのですから。それでも結果はわずかの八十六名に過ぎなかったことは、センターにとっても常識的に見れば大きな痛手のはずです。それなのに、片桐は十分な数字と言うのです。キャップである柏木は、そのときばかりは首を捻りました。

杉野はどちらかというと楽観的にとらえているらしく、それが柏木の考え過ぎではないのかということと、継続率が良くなかったのは、合宿が保護者にまだ十分に理解されていなかったからだろうと答えました。しかし柏木は、企業経営がそんなに甘いものでないことぐらいは、頭に叩きこんでいるつもりでいます。今、現在問題になっているその勉強合宿のことについてもいくつかの疑問を彼女にぶつけてみました。一つは、それがどうもこれまでやってきていた自由に参加できるピクニックがてらのものとは違うということです。『レモラ・ハウス』という、宿舎でやることになっていますが、そこはもうじき完成するらしく、彼も今まではさほど不思議には思わなかったことですが、やはり親としても大事な子どもをそんなところに年に九回もやるのは多少抵抗があったのではないかということが率直な感想です。しかし、よく考えてみれば、それでも八十六名残せたことは確かに代表が言うように大きな成果だったのかもしれませんが、それよりもさらに気になっているもう一つの点がありました。

それは、その『レモラ・ハウス』での合宿が組まれているのは、実はR局のカリキュラムだけだったということです。白状すると、柏木本人そのことを前々から代表から知らされ了解はしていたのですが、上司らの命令どおりその事実を公の場では伏せていたのです。彼自身、局のキャップとしてそんなこともあるだろうぐらいで、余り大したことではないと思っていましたし、ここでせつかく皆がやる気を起こしている雰囲気をしたずらに乱したくもなかったこともあったからです。それでもR局が、他の局とはまったく違った別個の計画の上で運営されていたことだけは確かでした。それに、もっと驚いたことがあります。R局の児童、生徒たちははっきり言って、他の局の生徒よりかなり学力が落ちる子が集まってると言っても過言ではないという点です。これはどういうわけかと考えてみますと、R局でやっている毎週授業の中で行う科目ごとのテストが、やはりこれもここだけ他と違って少しばかり平均点が落としてあるかなり易しい問題に作りなおしてあるということが事実として判明してきたのです。しかも念入りなことには、一斉に行う模擬テストなどの全国版成績表にはどういう操作をやったのか、ちゃんと本人にはわからないように別のメンバーを使ってまるっきり違った一覧表が作成してあるのですから、かなり手はこんでいます。柏木はそれを恥ずかしいことかもしれませんが、夏講が終わって、新学期が始まってからすぐに別の局から移って来たひとりの転校生がおり、その子の持っていたテスト用紙やコンピューター表を見て初めて気がついた次第です。彼はそのときの驚きをまだよくおぼえています。それは、まったく精巧かつ緻密にできてはいましたが、その中身に出てくる子どもの名前が全然違うまったくの別ものだったことに衝撃をもちました。担当の本部の職員に問い正してみたところ、それは、生徒たちに自信をつけさせるために、どこの局でも最初のうちはやっていることだと一蹴されたそうです。しかし、そんなことが今までのセンターのやり方からして考えられるでしょうか。柏木の疑問の根元はそこにこそあったわけです。彼は、一気にそこまで話すとさらに杉野の顔を直視しながらつづけました。

話の中心はこうでした。つまり、それら一連の操作の証拠に結局初めのうちはそういった効果もあるにはありましたが、そのうち段々と成績の上位の子たちは物足りなくなって、センターもこんなものかという落胆を隠せぬ様子で辞めていったという事実です。あとに残った者と言えば、ユウメイシリツ校の合格などとても今の實力では考えられない者ばかりでした。それに口コミでやって来た者の中には、学校の勉強についていけない生徒や児童、遅刻の多い子、中には一時

学校にさえどういう理由でか行っていない生徒もいました。まったく彼らが、墨塗りでもやりたい気分になってくるのもわかる気がしないではありません。柏木は、溜息にも似た深くくぐもった息をつき杉野に同意を求めるように軽く眼もとを顰めました。相手は、その都度相槌を打ちながらも黙っていました。

それにしても、代表も常務も一体このR局を本気で伸ばして行く気があるのでしょうか。柏木でなくとも不安感をいだくのは当然だったかもしれません。彼にはそれが今現在、直接だれでもいいから聞きたいことであり、やはり一番の疑問なのでした。まさか、このR局をセンターの方向転換のための良い研究材料にしようということではないのか、そんな恐怖感に近いものさえ、彼は感じていたわけなのです。

杉野は、柏木の言うことを聞きながらそう言われてみれば確かに自分がここに来てやってきたことも前半と後半とではかなり違ってきていることに気づき、今さらながら不思議に思わないところがないではありませんでした。最初は、これまでのセンターのイメージどおりかなりスパルタと言った感じがしましたし、彼女自身もそれを通してきたことはあります。しかし、生徒が少しずつ入れ換わって行くにつれ、自ずとその指導方法も変わっていったのです。ある公立中学校では、このR局やセンターのことを『お助け j u k u』という別名で呼んでいるという評判も生徒から偶然耳にしたことがあります。

杉野は、今新ためて自分自身の中にも柏木と同じように幾つかの疑問が渦を巻いていることに気づかされていたのでした。

## 第十の報告

---

閣下、ひきつづきあのふたりの子どもについて、しばらく報告します。

『レモラ・ハウス』にいるときの綾や健一にとっての疑問。それは瀬上が、ほんとうに自分たちの味方なのかどうかということでした。弟の健一は、自分の父親がいなくなったことを当時まだ二つだったためよくおぼえてはいませんでした。ところが、このごろ少しずつ、記憶にさえ曖昧なその像が実物か幻かわかりませんが、次第に深く大きくなっているような気がしていたそうです。

姉の綾も、健一のその悩みを聞いたことはありましたが、別にはっきりとは答えず、そのときも『レモラ・ハウス』の一室でベッドの隣に据えられた机に向かい座っていました。その日、海岸からもどってきたとき母親と瀬上は何を話していたのか。ずいぶんふたりとも怖い顔をしていたのが印象的だったことを綾は記憶していたそうです。姉弟にとってこの場所が、海も近く、とてもお気に入りのところだったのですが、もう二度と来たくないところになりつつあったこともまた事実のようです。

健一がそれから話しかけても、綾は、なかなか喋ろうとはせず、ただ、「うん」とか「そうね」とかを合間合間に繰り返すだけです。

やがて、健一が話し飽きたのか、自分のベッドの上で軽い寝息を立て始めると綾は、作文を書き始めました。書くと言っても八畳ほどの広さのリビングふうのその部屋には、さほど大型ではないにしろ、性能の良いコンピューターが机の正面の壁に埋め込まれ、どこも結ばれているのか定かでない複雑なネットワークで繋がれた端末装置のワークステーションが一台あるきりです。それにテレビ電話らしきものも置いてはあるのですが、綾はまだそれを一度も自分から使ったことはありませんでした。ただ決まった時間に合図が来ると母親や常務の瀬上がそそくさとやってきては向うから送られてくる資料や画像を機械から取り出し、何やら幾枚もの問題のついた紙やその回答用紙となってプリンターから変換されたものを、彼女が解いたり、あるいはそのままリプレイに写った問題を目の前に提示されやらされたりしてきたのが最近の彼女の日課だったのです。とくに瀬上は、綾についてのスタッフとの学習の打ち合わせはそこに備えつけてある電子メールでもやっていました。それら全てには、いよいよ間近に迫った『レモラ・ハウス』開寮に向けての最終的な予行テストとチェックも兼ねられていたふうなのです。

とにかく、そこに来るたびに頻繁に作文をつくることをやらされていた思いが綾にはありました。そしてこの時間になると自然に書く習慣がついてしまっているのか、コンピューターの画面を目の前にした綾は、別にあれこれ考えもせずキーボードに向かうのでした。それまで心なしどんよりと曇っていた眼は、気のせいかその黒い表示画面に白抜き文字を刻みつけようとキーを打ちすすめ、それに従い埋もれていた宝石を磨くときに浮かぶ光沢にも似た輝きを一段と瞳は増しながら、さっきまでの無口でおとなしいだけの彼女ではなくなっていることがすぐに誰の目からも見て取れるほどでした。

閣下、その作文は次のような書き出しからはじまりました。

## 姉、綾の作文の書き出し

『わたしは、遠い将来ずっと生きていたとしても、今日も明日もあさっても、その次の日も、その翌日も翌々日も、もう二度と虹は見ないだろう。そのことはわかっているのだ。はっきりとした理由は今の私には言えないが、そんな気がする。

わたしがどうして学校へ行きたくなくなったのか、瀬上先生もお母さんもほんとうのことは知らない。私が黙っていたからだ。話したくなかった。これからも当分の間は誰にも話さないつもりでいる。でも今は、不思議に正直に言えそうな気分になっている。どうしてだろうか。自分でもよくはわからない。私が自分で自分の命を終わらせてしまおうと、今考えていることも、その理由の一つなのかもしれない。

私は、お母さんの時々使う睡眠薬を家からこっそり持ってきている。お母さんは私を誰よりも信頼しているから、あまりそれを隠しておこうとはしなかった。もちろん人目につくところに置いていたわけでもなかったが。私はお母さんの持ち物なら大体どこにどのようなにしまっているのかほとんど知っている。

学校に行かなくなったわけをちゃんとここに書く前に、どうしてもこのことだけは言っておきたいことがある。それは、わたしはけっして、人からいじめられたりして学校へ行かなくなったわけではないということだ。誰に悪口を言われたのでも、いたずらをされたのでもなく、わたしはわたしの意志で行かなくなった。そのことをこれから書こうと思う』

綾は、そのとき藍色の箱に詰まった薬を持ってきていたポシェットから取り出しました。彼女のつぶらな瞳がその表面をなぞるようにしばらく見てから、またディスプレイへと移されました。

## 作文のつづき

『健一が隣ですやすや眠っている。その眠りをじゃましないためにも、わたしもこの薬を一粒ずつ飲みながら作文を書いている。』

わたしが、あの変な感覚をおぼえ始めたのは、小学校四年生のころからだった。おじいちゃんが死んでからだから、おとうさんがいなくなって五年ぐらいが過ぎていることになる。わたしだって小さかったのだし、健一と同じようによくはおぼえていない。ただ、今計算するとそういうことになってしまうのだ。

変な感覚というのは、学校まで歩いて登校しているときははっきりとはしなかったのだけれど、そのもやもやは教室に入るといっぺんに羽をつけ、わたしの頭の中をちょうちよになって舞いだした。そのうちどこか花のようなところにとまり、今度は突然絵の具の吹き絵をかけられたようにいっぺんに真っ白な風景に変わってしまったのだ。それからは、すべてがおかしくなってしまった。まず友達の顔を見ても、いつもは話かけられれば、おはようとあいさつするのに、その相手の顔と声とが、日頃わたしの知っている子とはなんだか違うように思えてきて、近よるのも急にこわくなってきた。先生だってそうだ。それまで、勉強のときや遊んでいると、とてもやさしくて好きな先生だった人が、その日から少しずつ先生のそばへ近づくことができなくなり、向こうからひそひそ話さえ聞こえてくるようになってしまったのだ。話し声の内容は、もちろんわたしのことなんだけど、ぎょうぎが悪いとか、勉強してないとか、遊んでばかりいてはだめだとか、初めはそんなことだったんだけど、そのうち、そんないかにも注意されそうなことは一つもなくなり、あなたはなんでここにいるんだとか、名前は何といつたっけとか、もう遅いから早くかえりなさいとか、当たり前みたいだが、でもはっきり言ってピンとこないことを何回も何回もしつこいくらい小さな声で言う。わたしもついきよとんとなって、そのたびに考え込むのだけど答なんて当然見つからない。わたしの名前は藤木あやよ、このクラスの子で、出席番号は八番で、家はあそこで、昨日も来てたでしょうって言おうとするのだがどうしてもそれができない。そのうち日が暮れかかってきたような本当にそんな気がしてきて、帰らなくちゃいけない気になり家に戻った。それが最初にそんな事が起こったきっかけだ。その日の夕方、わたしは、お母さんからたつぷりとしかされた。担任の先生が電話をかけてきたからだ。お母さんと先生が電話でなにを話していたのかはよくわからないけど、お母さんは、泣きながら、その後わたしを今まで見たことのないくらいこわい顔をしてしかつたのだ』

この時綾は、箱から取り出した瓶から三粒ほどさらに薬を取り出し、一息つくようになんの気なしにそれを一つずつ飲み干しました。そうです。彼女がこっそりもってきていたのは、彼女自身がそのとき作文で書いていたようにまぎれもない睡眠薬だったのです。彼女はそれが、ちょうど喉のところにちょっとだけつかえ、じっと止まっているように思えたのか、首を少しだけ振り、喉を軽く動かし唾といっしょに胃の中へ思いきり落とし込んだようでした。あの錠剤を飲むとき特有の、きつと甘くて少々苦い匂いが鼻先にのぼってくるような変な気がきつと彼女の器官にもたらされたことでしょう。そして、まだ眠気がやってきていないのを躰全体に確かめた彼女は、キーボードを小気味よく叩きながら、作文をつくり始めたのです。文章はつづきました。

綾の作文のつづき。

『それからは、お母さんも先生もわたしに対して厳しい態度をときどき見せるようになっていった。でもそのことを、わたしはあまり気にはしなかった。かえってそれまでやさし過ぎていた頃より好きになっていくくらいだ。そうやってくれることで、あの変な感覚をなくしてくれることになりさえすればと、わたしはいつも心から願っていたのだ。

これだけは今でもはつきりと覚えているけれど、わたしがほんとうに学校へ行かなくなったのは、あのリレーのときからじゃないかと思う。あのときも、あの変な感覚が突然、急に悪くなったお天気のようにわたしの頭の中をおそってきたのだ。

小学校の最後の年だった。わたしたちの学校では、月に一度全校で学年ごとにクラス対抗のリレーが行われている。わたしもその月は、選手の順番が回って来ていてどうしても走らなければならなかった。わたしは、何となく不安だった。あの変な感覚が、その日はずっと朝起きたときから始まっていたからだ。それがいよいよ、それまでなんとかしておさえていたにもかかわらずバトンをもらう前になって、とうとうあばれだしてしまったのだ。

わたしは、白い線の上に五人の他のクラスの子といっしょに立っていた。クラスのみんながわたしを応援してくれているのがよくわかった。でもその声がなんだかよく聞きとれない。最初は、きつとわたしは気のせいだと思った。みんなが一度に言うからだ。そんなことはよくあることだ。心配することはない。それでも反面不安にも思っていた。みんなは、ほんとうにわたしのことを応援してくれているのだろうか。内心は、ころべばいい、抜かれて一番びりになればいいと思っているんじゃないだろうか。そんなことを考えているうちにあの変な感覚がもうどうしてもおさえきれなくなってしまったのだ。わたしがバトンをもらう相手は、もう、すぐそこまで来ている。わたしはどうしたらいいのか迷った。わたしの頭の中には、早くももう真っ白といった感じに、少し濃ゆめの幕が下ろされていた。足音がばたばたと聞こえてきている。わたしの手には、もうじきあの冷たいバトンがわたされるのだ。

そんなときだ。たしかに声がしたのは。

声はわたしに、いつもよりやさしく、あなたにはそこにいる理由がわかっているのって聞いた。わたしは、いいえ、と答えた。そしたら声は、つまらなさそうに返事をしてくれたのだ。

そう、だったら立っていることはないわ。すわりなさい。

わたしは、走り出すことも、そのまま立っていることもできず、その声に、はい、わかりましたよ、と答えるようにバトンをもらうすぐ直前で、その場にしゃがみこんでしまったのだ』

綾は、眠ってしまいました。幸運なことに、一粒づつ薬をのんでいくという発想は、やはり中学一年生の考えつくことでしかなかったのです。致死量にいたるそのはるか手前で彼女の思いはあっけなく断たれてしまったのでした。彼女は、次の日の朝いつもより遅く、多少寒気を覚えながら眼を醒ましたに過ぎません。風邪を引いていたのです。

目を覚ましたとき、弟の健一がどうしたのか、心配そうに綾を見つめていました。

「あら、健一、おはよう」綾も、なぜか眠っているときからそう言いたくて仕方がなかったように最初に笑顔で答えました。背中には毛布が掛けられています。

気分はどうか弟がたずねると、綾は、それにも笑顔をつくりだじょうぶであることを伝え、毛布をかけてくれた健一に対し、今までにないくらい丁寧にお礼を言いました。綾は自分でもその日は、思っていることがすらすら言えるのに驚いていました。いったいどうしてしまったのだろうか。綾はほんとうに滝にうたれたようなスッキリした思いだったと後で作文にも書いています。昨日と較べ何かが自分の中で変わったような気もしましたし、やはり何も変わってはいない重い気持ちがないでもなかったそうです。とにかくそのときは、これまでより少しはまじな気分だったということかもしれません。綾は、そのときそんなことを考えながら椅子から立ち上がりました。時計は、九時半を差しています。コンピューターの方は、自動操縦が働き電源は切れていました。まだ薬が机の上に置いてあり、健一がそれに気がついていないことを知って慌てて引き出しの中へ仕舞い込み、片手で軽くコンピューターのスイッチを入れると念のため消去ボタンを押しました。

綾は、その日が日曜であったことに気づき、健一に外に出て遊ばないかと珍しく誘いをかけました。

窓から外の様子を窺っていた弟の健一は、姉の元気な声を聞いて安心した様子だったそうです。扉を開けると、健一が小さな声で空を見上げ言いました。綾もそれにつられ空を見、掌をだしてみました。部屋の中からはわかりませんでした。確かにそこに湿っぽい冷たいものが落ちていました。閣下、実にその西の島にもその季節には少々早く、雪が、この地域すべてを静かに覆うようにちらほらと舞っていたのでした。

## 第十一の報告

---

閣下、報告もいよいよ大詰めになってきましたが、ここに、ある密室でのCAN進学センター代表の片桐と、この地ではかなりの実力の持ち主との会合の資料がとどきましたので御覧いただきたいと思います。これにより、この辺境の地の教育の根幹がおよそどのように動き、またどのような方向に進もうとしているかがうかがい知れると思われるからです。

初め、片桐に対して、老人は何度も念を押すようにほんとうに今度のセンターの計画がうまくいくのかどうかたずねたそうです。

その老人は、年齢のわりにはまだ皮膚の艶もあり、短めに刈った髪に白髪がまばらに混ざる程度で、片桐と向かい合って座っていると確かに親子ほどの関係には感じられましたが、その話の節々でみせる挙措動作は、その関係をひと回り越える威厳と若々しさを保っていました。ふたりの間に置かれた南米産のマホガニーの分厚いテーブルの表面がいつそう際だったように上部からの照明を受け、光り輝いていたそうです。

片桐は相手に、既に、R地区のほか二箇所ほどの値段も手頃な人里離れた場所に土地を買い求めていることと、さっそく西の島では、その一番隊として来週から八十六名の子どもたちが実践に移っていくことになっていることを報告しました。自分たちの開発したシステムと総合力で、センターもついに第二段階目へと突入していくことが片桐自身の中に興奮となって輪のように広がってきていることがその話しぶりからも充分うかがえます。そのためにも、これまでになかと協力してもらっていたのが、今、彼の目の前にいる老人であるらしいのです。この調査書を見ながら、そのことが少しずつ私どもにもわかってくるのにそう時間はかかりませんでした。

老人は嘎れた声で、自分としても今の教育に不満があつて片桐に協力してきたこと。学校では教師たちが我がもの顔でふるまっていて、問題のなんのそのと言いながら、その解決の糸口さえ見つけきらずにいること。そのために、そろそろ教育にも自分の方から積極的に手を出そうと考え、片桐が示したことに興味をもちながら自らも実践しようとしてきたことなどを一気に話しました。老人自身、自分の配下の何名かの部下が情報を知らせにきたときは半信半疑でしたが、それでも片桐と会って三年もせぬうちにセンターが現在のようなになったのは彼の期待していた以上のことで、その成長はかなりの度合いで認められると、最後に片桐に対し強く賛辞を送ったことも、閣下、ここでつけ加えておかねばなりません。老人は、それからしばらくして少し強くしわぶきしましたが、それは喉の調子を整える単なる咳払いとも取れました。

彼は、以前からこう思っていたようです。それは、閣下、私どもも充分驚嘆すべき事実として浮かび上がってきています。これから彼の話したことを閣下にくわしくご説明いたしたいと思えます。

二十年ほど前の一時期、この地域で流行ったあの『コウナイボウリョク』というものを閣下には思い出していただきたいのです。あれは大方は生徒たちのあの頃の学校教育に対するつまらなさを如実に物語っているものだとして世間では評されていましたが、そのかくしゃくとした老人は、そうではないと信念をもって考えていたようです。つまり彼は、常日頃から産学一体となった教育を義務教育の段階か、もしくはもっと早くからやるべきであると教育界に進言している一人でした。しかし、それも老人のあまりの傲慢さからなかなか取り入れてはもらえなかったようです。政府の『キョウイクシンギイイン』に、だいぶ彼の息のかかった人物を送り込んだりもしていたようですが、いかんせん思惑どおりにはなかなかことはうまくいきません。そこで彼は、ついに思い切って発想の転換と言うものをはかったようなのです。

それは、彼自身が今まで、あまりに公教育にこだわり過ぎていたのではなかったかということでした。すると突然視界がひらけてきたように思ったというのですから不思議ではありませんか。JUKUというものがあるではないか。どうしてこれまで眼を向けなかったのか、そう老人は、目の前に一つの抜け落ちていた穴ぼこが見えてきたように思わず喜々としてきたそうなのです。

そんな相手の話を聞きながら、片桐は、固唾をのみました。老人の目は、深い谷間から岩肌を照らすように鋭く光っていたそうです。老人の考えは、まだまだつづきました。

彼は、教育について少し自分でも調べたり実際に見にでかけたりして、ある学者の考えついたモデル学校がどうも気に入ったようなのです。そこでは、あの、今ある学校での教育とはまったく違った枠を取りはらったような、つまり具体的には実際の教室の壁をなくしてだだっ広い突き抜けの部屋や広場や空地で、子どもたちには教科書の代わりに釘や板切れを持たせて作業をさせるといったものだったのです。子どもたちの小さな手で板と板とが組み合わされトントンタントンと甲高い音が響いてきて鋸の引く音や金槌の叩かれる音が、今にも彼の耳の鼓膜にはとどいてきそうなくらいだと言います。老人はそのことを知ったとき、一見それは本来の学校の姿をまったく無視したように映るかも知れませんが、またそういうふうに取り立てられているようですが、ほんとうはそうではない、別の本質的なものだとしてすぐに考えついたそうです。あれほど世の中の理に適ったよく計算された教育は、ほかにないと今では強い確信さえもっている様子です。

老人は片桐に、はっきりその場で次のようなことを明言したそうです。そのモデル校は一つの例えであって、その学校が教えているものは直接に金槌や鋸を取れといっているのではけっしてなく、学校の内側だけを見ているもこれからは駄目だと言っているのだ、ということ強く力説したそうなのです。社会と繋がりを持ち、系統づけていかななくては美しく健康な教育などできるはずがない……そう老人は滔々と話しつつけたのでした。

老人の論理にしたがえば、子どもたちには早くから適度な労働とそれに結びついていく学習が必要だということです。そうすれば、彼としても援助を惜しまないでもない、そう片桐の顔を真正面から見すえながら言いました。さっそくそれが将来の役に立つのであれば、混乱する社会の中でも、子どもたちは目標を見失うこともないだろうと彼は考えているようなのです。

彼流に言えば、回りを見渡せばどうせあれこれ言いながらもほとんどの者が、おさまるところにおさまってしまう、それがこの地域なのだそうです。時代がながれていても本質的にはそう変わることはなく、にもかかわらず学校の方はその本質を見ることもなく自分たち自身にはまったくの進歩をはかろうとはせず、それどころか最近では子どもも集団でくるのなら教師も集団でいこうなどと目には目をのやり方で、ただ闇雲に押しえつけにいつてる。それがまったくの無能な方法であるという気がして仕方がないらしいのです。老人は、そもそも教師の今の質も問題なのだとして吐きすてるようにつけくわえていました。あの校舎のつくりから一つ一つの屁理屈張った決め方まで全部がどうも外にいる彼らのような人間にとっては、ニーズに合っていないと言う感じを受けつづけているようなのです。今の中堅あたりの教師は、やたらと偉そうなことを子どもらに吹き込んでいるが、いざと言うときはなにもできないし、すぐに見せかけだけの徒党を組みたがるのはどうしてなのか。彼は現状に対して強い怒りさえもっているふうにしてその報告書を読みますと見えてきます。老人は、老人なりに教育不信は大きいのです。何度も申し上げたように再三、そちらの筋には彼らの会合で話し合った意見を伝えてはいるそうですが、一向に埒があかずほとんど業をにやしてしまっているのが現在の老人の心境です。教師を選ぶ試験制度からしても、過去、この地の動乱を生き抜いてきた彼からすれば手ぬるいといしか思えないわけです。まるでそれは、組織と個人との狐と狸のだまし合いっことしか思えないようなのです。

報告によりますと片桐は、それには慇懃に返事をかえしていつています。閣下、彼がどれほど今回、この老人との会合に神経をくばっているかがよくわかりただけかと思えます。その証拠に、「まったく、おっしゃるとおりです」という言葉を、彼は何度も呪文のようにつぶやいているのですから。彼は、そんな老人の難問、疑問に対して、自分たちとしても、そんな学校からはみださざるを得なかったり、嫌気がさした子どもたちにチャンスをもう一度与え、救ってやるというのが目的であり、そのためにも、今度の子たちには学校の卒業証書や学歴に変わり得る魅力ある物件が必要であることを、老人の深い目なざしを見つめながら説明していました。

老人は、それに対して、つまり自分たちと結びついて、その子たちの中から使えそうな者を優先的に採用してほしいという片桐の申し出を素早く理解したようで、表情は何一つ変えず淡々とした態度でうなづき返していった様子です。

片桐もそれに対し、そのかわりセンターとしても彼らの注文にできるだけ応じた子どもを造り上げていくつもりであることと、両親に対する説得力の方も、そのような目的があれば人生設計が万全であることから多大な安心を得るであろうということを順序よく話していきました。多少悪い条件であっても、彼ら老人たちの持つ大きな組織に将来拾ってもらえとなれば、自分らの子をセンターに来させる甲斐があるというものです。というのも、総指令官閣下、今度西の島『レモラ・ハウス』で実践に移る子どもたちは、近くの進学校に入ることもできずにセンターに頼ってきている、社会から見ればどうしようもない落ちこぼれた生徒たちばかりなのです。センターでは、シニアの受入れも万全な体制であることから、まずは当面中学までは面倒を見てやり、またその後はそれから考えることも補足しながら片桐は、一気に捲し立てました。老人に、そこではとにかく自分たちの勢いというものを感じさせる必要があることも彼持ち前の計算から素早く読取り、それゆえにそのようなやりかたをとっていったわけです。それは、即、センターそのものへの信頼に結びつくはずなのですから損はないわけです。まさしく閣下、このやりとりが報告文を定期的にお届けしている私たちと閣下との関係にも何か似ているところがあるように感じられてくるのは私のただの思い過ごしでしょうか。

老人は、最後に片桐に対し、それがうまくいけば大したものであり、自分たちとしても今の教育制度と、そこからつくられてくる子どもにほとんど愛想が尽きていたことが頂度重なっていたことを繰り返し述べ、そろそろなんとか手を打たねばならないだろうと思っていた時期であったと結びました。まずは、五年後あたりの片桐たちの自負する第一号の子どもを見て評価を下す心づもりであるらしいことがその相手の心理を奥深く抉る目なざしから伝わってくるようだったと調査書にも記されています。老人としましても、企業体内での教育が今以上に効率よくできることを期待しているわけでしょうし、そのうちこれまでのような学校の卒業証書より片桐たちの運営するセンターを出た証書のほうが、はるかに値うちあるものとなるかも知れぬことを、まったく誇張ではなく飄々とした口ぶりで話したわけなのです。

しかし、そこは片桐です。彼もまた自分を抑えることはわきまえていました。

そんな老人に対して、自分たちとしても今までどおり子どもたちをより幸福な状態へ導くために、できるだけ細かく単元を組み立て訓練していくことだけを考えていくつもりであることを再度確認しました。そして、そのためにも綿密に構成されたカリキュラムは、彼らセンターにとってはただの仮の姿であって、隠れ蓑であることも打ち明けました。問題はカリキュラムではなく、そちらにとっても私たちにとっても、より自分たちに役立ってくれる人間を育てていく事、それが全てであると彼は多少強く、しかし冷静に強調したのです。

片桐は、その男の家を辞すとさっそくタクシーを拾い本部へと急行したそうです。

携帯で『レモラ・ハウス』との連絡をとるとさらに彼は上機嫌になりました。もういつ開校してもいいと言う、彼にとっての右腕の常務、瀬上の自信に満ちた声が聞けたからです。そこで、つい気が緩んだのかさっきまでの男との話を瀬上に知らせたことは、今回この計画にとって彼の最大の誤算であったかもしれません。

今の彼の心境をたとえば、やっと三年がかりの恋が実った一途な若者といった感じであったはずです。ようやく影の大物も彼らセンターが今までしてきたことを認めざるをえなくなったにちがいないのです。当然、あちらも目をつけているのはCANだけではないと思われますが、これからは、どちらがあの人たちの気に入った子どもを造るかで勝負は決まってくることでしよう。片桐はそのことも瀬上に注言として発することをわすれてはいませんでした。最後は、閣下つぎのひと言です。この地特有の労をねぎらうような調子でその電話は終わりを告げました。

瀬上君、『レモラ・ハウス』の件よろしく頼むよ。

オツカレサマ。

それが今思い起こせば、片桐の瀬上への最後の言葉だったのです。

## 第十二の報告

総司令官閣下、このたび係りの者から受け取りました閣下からの御手紙ならび御通達を、私はどのように判断すればよいのか、いささか困惑し心労しきっております。承服しかねぬ気持ちもさることながら、反省すべき点も重々承知した上、閣下には御無礼のないよう、今後とも誠心誠意を尽くしていく所存です。なにとぞ今はいささか気が動転していることと御寛容の上でお聞き願いたいと思います。まず、わたくしどものこれまでの報告が遅々として進まなかったことを先にお詫び申し上げておかねばなりません。私が閣下の意にそぐわなかったことは、おそらくそれが最も大きな理由かと思われるからです。ただお分かりいただきたいのは、私がここで自らの失態の申し開きをしているのではけっしてないということです。私は、結局は潔く閣下からの御罷免を承ることになるでしょう。ただ、これまで同様この視察団の代表として、いかばかりかの意地と態度でこのおそらく最後になるであろう私どもからの報告文をなおざりに片づけることだけは避けておきたい気持ちで臨んでいるだけなのです。そうすることが、私をこの視察団の代表として初めに御指名下さった閣下への最後の意に添う忠誠であると確信しています。なにとぞ老僕の意気と感じ取って、わずかばかりの文面の猶予を今少しお許し願いたいと思います。

さて、何でもそうでしょうが少しずつ対象に接近するにつれ輪郭がつかめ、わずかずつはっきりしてきたことがあります。それはこの辺境の地において最も基盤となるものは、やはり血縁関係といって良いことです。これは、教育の世界と言わず、どの世界にも同じだけの重さで被さっています。

人々は「血」というものを大事にし、そこに自らの拠り所を見つけようとします。頂度一人一人の顔を見ていますと一つの幹から枝分かれした梢に成った赤い実のいくつもの果実のように思えるのです。どの実も細かく伝わる管からまんべんに栄養を吸い取り、光沢を浮かべ豊に実ることだけを目標にしています。少しでも自分と同じ幹か、もしくは枝から奇形の実がなることは極度に嫌います。それは、他人でも「血」の繋がりを感じているこの地域の者たちの特徴とも言えましょう。

閣下、ここで教室を一つの木とし子どもたちを実に例えてみます。子どもたちは自分たちがスクスク育つことだけを指して一生懸命に学習します。教師は自分の担任するクラスという木が立派に成長していくことのみを願い教育に励みます。『キョウトウ』や『コウチョウ』は、それぞれの学校という木が無事にその日その日を日照りや害虫など病気を寄せつけず安泰であるかを考慮しながら監視に一段と力を注ぎます。それらを受け入れる地域という大木は、一個一個の学校という木が思うように育成されているかを見るため、常に連絡を取るのに便利な接ぎ木を行いその繋がりを濃くします。それは縦の経路を通じて生徒一人一人にまで行き届きます。かくして木を通しての「血」の関係は教育に於いて完成します。

完成された血縁の中で、個々がどうあがいても、もはやその一人ひとりの中で描く自己というものは存在しません。在るのは、周囲との関係の中で結ばれた像にすぎず、すべては他者同士の約束事の中で決定されていくのです。そこに口を挟んだり、自分対する他者の抱く不満を持てば、無残に剪定され芽さえも摘み取られていきます。ただ、それでも異形の実も確率的にいくつか

生成され、そのうちの何個かは摘まれずに野ざらしにされておくこともあります。なぜなら、その不格好な実によって、より形の整った均一な多くの実の価値が鮮明となり、有効に外部に対して機能するからです。その働きとは、農園を世話する教師や地域、ひいては子ども本人に画一的な意識を育み、他者によってつくられている幻の存在理由を信じ込ませることで、摘果された者たちに対する優越意識さえ持たせていくということです。閣下、私たちはそこにこそ、『サベツ』の永遠不変な創出のメカニズムとそれを可能にするいびつな構造を見るのです。それはさらなる入り乱れた枝葉を伸ばすためのエネルギーへと変換され、貯蓄されながら次なる歪んだ植生の増殖を目指し、連動していくのです。

総司令官閣下、最後に今、私の申し上げられることはこんなところですが、御報告しておきたいことはこれまでの報告文で伝えてきたことと思いますが、何分観察がたりず、はっきりとまだつかみきることができないのも事実です。それに私は自分の身分をわきまえることは知っておりますし、次の者へその責務は譲りたいと考えます。

ただ、最後に申し上げておきたいことはこうした「血」の結末が、この地を、ある意味で固い殻に閉じこめさせたままにしているということは事実ですし、また、あるときには恐るべきエネルギーとなり信じられないほど強力な瞬発力を生み出す要因ともなうことがあり得るということです。閣下、私がどこかまだ危惧せずにはいられないというのはその点なのです。この地に我が中央の世界で培われた教育というものを取り組んでいったとき、この辺境の地域は、おそらくこの地域なりの方法によって見事にそれをつくりかえることでしょう。そして、それによりさらに大きく立ち直ったこの地は、いずれ我が国中央にとっても驚異となるはずですが、しかしそれにも増し、もしそれが大木の栄養素として初めに受け入れられたとしたなら、子どもたちは、あるいは教師たちはそれらを自ら拒絶するしない関係なく、かりにそれが自分らにとって毒素であったとしても身に流し込まざるを得なくなることはわかりきっています。あの、無数の細胞に囲まれた器官の網の目を通して、あたかも中毒になったヘロイン患者のように、血管がボロボロになるまでそれはつづけられるでしょう。

閣下、私が前々から心配していたのはこのことなのです。その毒素が一体どういうものであるのか、今の段階では私にもわかりかねます。ただそれは、徐々に少しづつ蝕み始めるにちがいありません。ときには時代に乗り一度に広がることもあるでしょうが、概ね静かに、行つては戻る蠕動を繰返しながらわずかつつ、しかし確実に接ぎ木から接ぎ木へとその毒素は伝わっていく筈です。閣下、私はこれを『エデュケイショナル・スノウ』と名づけます。まさしく、教育の白い粉です。街をたむろする『キョウイク』によって薬づけにされていく子どもたちや母親を垣間見る前に視察団代表の職を辞させていただくことを、閣下、今となつてはただただ光栄と思う次第です。

\*

\*

## エピローグ

非常用扉の大きな窓には、暮れかけた薄い浅黄色の膜に覆われた景色が映っていました。その横には襞を幾本も折重ねながら内臓のように落とし込んだ通気孔があります。そのすぐ真下に見えなくなる孔の中には、何か深い叫びのようなものが、いくら手につかもうとしても馴染めない樹液のようなものに塗固められ、押し込められているようです。

綾と健一も、もしかするとこの『レモラ・ハウス』にいる短い時間の間、こんな空洞へ何やら口では言い尽くせぬものを投げ込んでいたのかも知れません。コンクリートの白壁に、ラウンジから漏れてくる蛍光灯の明りを手がかりにやっとう像を結んだ一人の男の影が距離を置いて縦に伸びています。等身大よりやや大きめなはずなのに、なぜかそれは同じくらいの大きさに見え、それでいて他人の影のようによそよそしく、時折りほぐれたように白みます。総司令官閣下、それは瀬上の姿です。

瀬上は、片桐からの電話のあと受話器を置くと窓から視線をずらし、それからしばらく影と向かい合い立っていました。

綾と健一は、たった今母親に連れられて帰っていったばかりです。瀬上は、今日は送りに出ず、一人この『レモラ・ハウス』に残っていたのです。ときどき肩口を膝の上へ落とし込むように相手の影は踞み、またすぐに立ち上がったかと思うと横へ退き、今度は上下に揺らぐと静かに近づき、独言をするように、さっきから耳をそばだてている瀬上の方へとつぶやいて来るようなのです。

閣下、報告文は、確かに終わりました。しかし、私はこれを最後の私からあなたへのお手紙としてやはりお渡ししておきたいと思います。もう一度、我々視察団の見てきたことを確認するためにも、その根もとのところからある予想とある確信を込めて出発した手前、これを最後の、閣下へのほんとうの私の気持ちといたしたいと思うのです。

閣下、原初の宇宙にあって水素とヘリウムの質量比がそもそもの運動の出発点だと仮定をします。そうしますと、センターやこの地の『ガッコウ』にとって生徒は一对の二項対立そのもので、これまでひたすら水素の役目を果たしてきてくれたと思われます。

それから判断してもヘリウムというのは、我々大人や、あるいは教師たちの側を意味します。二つのうちそのどちらかに自己を固着化させ早々と腰を落着けてしまったため頭の中身が信じられないぐらい急速に固くなってしまった実体的な対象と言ってもいいのではないのでしょうか。ところが、その二つの変成の後、実体としての質量に耐え切れなくなった我々大人の歪みを持つ空間はじっとして生きられないことは知っておりますから、渦をつくり凝縮することでときどき爆発を起こし周りに乱暴を振るったり、そうかと思えば果てしなく歪みを収斂させ、同時に厄介なことに別の場所では他人とさらに入り組んだ関係をつくるなどして拡張を遂げ、これまで様々な末期の足掻きを繰返し生延びてきたと考えられます。

瀬上は、そのとき、向かい合う影との距離をはかり、何か私たちにもはかりしれない思いで声を上げようとしているようでした。しかし影はそれを重々承知したように彼には何も話す隙を与えず、揺らいでいるだけです。

閣下、この地の教育体制が、たしかに閣下が申されたようにいつまでつづくかどうか、私どもも正直危惧しております。しかし、今は、ただ進化するものの鉄則を踏んでいるだけにすぎぬと申し上げておかねばなりません。

[まるで君の言い方は、子どもたちには今生まれてきたことをあきらめてもらうより仕方がないって言ってるみたいだ]

そのとき瀬上の声がしました。影と向かい合ってから彼は、この時初めて言葉を発したようです。久しぶりに話したせいか興奮を隠し切れず、咽喉の奥で息が唾液と混ざり少し掠れているように我々からは思えました。

総司令官閣下、子どもたちは子どもたちなりに進化しようとしています。案外悲観的になっているのは我々大人の方であって、子どもたちはそのこのところはどうも乗り越えていけるようにしっかりとできていると思うのです。大人たちが生きた以上に十分に生きていけているはずなのです。閣下、我々大人も老化といっしょに一応の進化はたどってはいます。その辺は組み合わせた二つの歯車と同じでわりとうまくいってると言っているいいわけです。総司令官閣下、肝心なのはそのバランスそのものなのです。

[しかし、その肝心のバランスが壊れ出したらどうなる。いや現にもう大方壊れかっているか、潰れてしまっているように僕は思うんだが]

瀬上の声がまた、してきました。彼自身、一人言のようでしたが、そんな質問を影にしているともとれました。彼にしてみれば、今ある胸の塞ぎが幾らかでも取り除けるならばと思っていたのかもしれませんが。しかしただの影にすぎない相手が、そんな瀬上を対峙するものとして取り合わないことはわかりきっています。

総司令官閣下、旧いバランスの後には、また新しいバランスが生まれてくるのがくりかえされます。

二つの歯車が組み合わせられていけば、一つの歯車の歯数と一定時間に回る回転数が決定していることで、もう一つの歯車の、それと同じ時間に回る数はその歯の数に従って少しの狂いもなく決まってしまう、そんなこれまでただ機械にだけとおっていた定義を閣下は信じられることがおできになりますか。それと同じことなのです。その尺度でとらえていたら教育など必要でなくなってしまう。バランスは意志とは関係なく不完全なものなのです。その意味でも、だれかがそのバランスが壊れたように思うとしたら、それはそれで事実です。ただ、まだその人物が新しい枠組みの中の自分の新しいポジションに不賛成か、不慣れなためそこから全体が見渡せないでいるだけともとれます。問題はバランスであり課題は個々の内部にあると言っているのです。

閣下、おわかりになられますでしょうか。そうとらえようができまいと歯車は大抵のことはやり過ぎさせてしまうのが、この地といわず我々の世界の現状なのです。バランスは、全体で一つであるように見えながら、実は各人の中にそれぞれ存在しているようなもので、とくにこの辺境の地に少しずつ潜みながらも暮らしているとわかってきます。だからといって人の数あるためそれで済むというものでもなく、人の数だけありながら、それがまた大きなバランスをつくりだして

もいるのです。子どもたちは、基本的には与えられた事をやっていく生き物と思われます。大方は主導権を握っている大人たちが、ときにはそうではない子どもたちも一緒にさせてそのことを知っていようがいまがお構いなしに今ある自分たちのバランスを保つことに専念させてしまうことになってしまうのです。たとえそれが不完全で不十分なものだとも最初からわかっているてもです……。

[どうしてそんなことを繰り返してしまうんだ?]

瀬上は、影に鸚鵡返しにたずねているようでした。

閣下、誰でもそうですが、孤独が怖いのです。大人も子どももそれは関係ないのです。瀬上の影は、洩れてくる光だけでは少し心細いらしく壁を伝って広がり切るには少し弱すぎて、さっきから困惑しているようでした。それでも風に揺れる蠟燭の光のようないつ消えるかもしれないそんな不安定さはなく、やがてまた輪郭を徐々に取りもどすともとの自分を思い出したようでした。

閣下、CAN進学センターも同じことです。それ自身一つの巨大で不完全なバランスなのです。色々な歯車が幾つも組み合わさって回っているに過ぎません。子どもと保護者と職員と受験と学校教育と地域と町と数え切れない歯車がそれぞれに噛み合わさり見えないシフトに連結され動いているのです。でも問題は、その一つ一つの歯車ではなくて全体の不統一なバランスの方にあるのです。

瀬上の影に変わったところはありませんでした。ただ、幾分前と比べると疲れたような、そんな力の抜けた感じがどこからか汲み取れました。影は本当は自分の本体と向かい合うことが苦手か、あまり好きではないらしい様子でした。

閣下、片桐と老人の会合の後、一週間してから『レモラ・ハウス』での第一回目の子どもたちの入寮が行われたとき、既に瀬上の姿はセンターから消えていました。

代表の片桐は、それに対し堅く口を閉ざし職員たちには何も言わず、平然とした態度を保ちながらセレモニーに参加しましたが、誰の眼からもそこに漂う裏切りと動揺の色は隠し切れないふうでした。私どもが調べようにも、やはりその理由、つまり瀬上がいなくなったその原因までははっきりとはしないというのが現実です。

しかも、職員たちを驚かせたのは、それだけではありませんでした。『レモラ・ハウス』がその開寮からわずか数日たって早くも名称の変更が行われたのです。それには、合宿日に当たっていない期間が選ばれ、子どもたちには知らされることなく一部の職員たちの間でパンフレットから建物に刻み込まれた文字まですべての変更の手続きが速やかに行われていったのです。銀色の屋根の建物には、『クラーケン・ハウス』と光沢を浮かべた鉄の文字がプレートに埋め込まれることになりました。

海岸から吹き寄せる潮風を受け、特別加工されたその文字は錆びることもなく、海の巨大な海龍クラーケンにふさわしく、辺りの島々をのみこむように輝きを放ち、その後子どもたちを一人、また一人と受け入れていったことは、閣下、今さら申すまでもありません。閣下、この地にも夕闇が迫っています。日は、広大な内海を越え聳える丘陵の向う側に沈み切ってしまっています。しかし、その光の残照は鮮やかに今も残っているのです。

それから数日たってからなのですが、一人の男が、ある駅の向かいのビルの食堂に窓に身を擦り寄せるようにして座り、食事をとっていたという情報が入っていました。彼は食器から目を離すと、そこは遠近を逆にする眼前の駅舎をただじっと見ていたそうです。幾つものレールが地面を匍うようにホームへ集まりその列車の車両は、この駅が都市からかなり離れた近郊の終点でもあるため客数も少なくそのときは疎らでした。その中が、角度をつけてはいますが、調査をする者にも何か目の前にあるようにはっきりと見渡せたと言います。網棚に置き忘れられた週刊誌の類いまで、はっきりと見透せるようなのです。それぞれの客は立ち上がり、どの車両にも等しいぐらいの人数が重たげな動作で張りつくように、仕事を終えた安堵感か軀の隅々に残る疲労のためか、どこか隠し切れぬ投げやりさを込め扉の前に立ちじっとしている情景は、まさしくこの土地独特のものです。そのまま電車は静かに滑り込み、一つの市電の向うにはまた別の会社の市電の駅があり、その両方の駅にたまたま一緒に二つの車両が入ってくるとその距離は縮まり、二つの車両が調度重なったようにそれぞれを上下に位置させていきます。人々は下り立ちます。上空では山際に赤い炎がゆらめきその上は黄色がかり、そしてまたその上はそこから少しずつ青味がかっていきます。やがて透きとおった青になり、霞んだ雲に溶け董色に染まるとそれもわずかで、もう闇が日の沈んだ中心から引き摺り下ろされ、その弧自体を絞り込み丸みを細らせるようにそちらへ連れ込まれ、持って来られているのがわかります。日が沈んでからずいぶんと長く感じられる一瞬です。燃えるような赤の次は、今度は淡い茜がむしろ同じように長く散ったように線を描きだしていました。

電車の中では清掃も終わり、また出発の準備が始められている様子です。車掌が忙しく立ち働いていたことでしょう。線路は闇の中に見えなくなっています。山際から山裾へ赤い残照は降り、それでも照らします。一瞬白みがかかったようにそこが霞んで見えた、と記録には明記されています。例の食事をとっていた男は瞼を凝らしたのでしょうか。照明の中、電車のホームを行き来する人々の影とその白い影が交錯したのでしょうか。山際に全ての色が出揃った感がしていたかもしれません。沼のような内海は陸と山と空とを一つにしたようにそこにうっすらと伸び広がっていたことでしょう。アパートのように立ち並んだ列車は行き急ぐ乗客たちの住家のようにそこにあるだけなので。工場は地面に横たわり腰高にその全体を寝かせています。

情報によると、彼は食事もそのままにそこを立ち、別のところへ行こうとしましたが、ふとまたさっきの山裾が気にかかり窓枠へ歩み寄ったそうです。山が一瞬紺青に色づき浮かび上がったように思え、男は怯んだように軀を竦ませ、またすぐにそれも消え、視線をもとに戻すとようやく闇は底に下り立ったと詳しく書いてあります。

閣下、この男が瀬上だったのか、または二人の子ども綾や健一と母親の前から姿をくらました男の姿だったのか、果ては臨時採用の男木村だったのか、私たちにも想像が付きません。ただこのとき、やはりうっすらと白い粉雪が人々の上へ下り立つように舞いおりていたことだけは付記しておかねばなりません。

エデュケイショナル・スノウ。

<http://p.booklog.jp/book/36657>

著者：夢屋プラネットワークス“游人たち”

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asobito/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36657>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36657>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.